

ISSN 1343-439X

全日本大学ソフトボール連盟機関誌

ウインドミル

第4号



全日本大学ソフトボール連盟

Mizuno®

THE WORLD OF SPORTS

ミズノはシドニーオリンピックのソフトボール用具の
オフィシャルプロバイダーとして大会を応援します。



TMO 50000 1999
JOC SP-001

プラス10mの飛び。



このバットが、飛びの次元を変える。

カーボン+アルミ+カーボンの三層構造が、

想像をはるかに超える反発力を生み出した。

ボールをはじく力が違う、打球の伸びが、鋭さが違う。

全日本ナショナルチームが武器とする弾丸製造機「テックファイヤー」。

夢の頂点をめざす全てのプレーヤーへ、今デビュー。

※全日本ナショナルチームの選手による従来のミズノ製バットとの実打テストの結果、平均10m前後の飛距離アップが確認されました。



TECHFIRE

NEW テックファイヤー ¥25,000

K-CLUB クラス
テックファイヤーは、
K-CLUB店より
先行発売いたします。

※スタンダード型

※ポトル型

スポーツあげたい、スポーツほしい。
全国共通スポーツ券

●ミズノインターネット情報は—— <http://www.mizuno.co.jp>
●記載価格はすべて税抜き価格です。消費税相当額はお客様にご負担いただくことになります。
●ミズノ製品についてのお問い合わせ・ご相談は——「ミズノお客様相談センター」
東京 TEL (03)3233-7110 FAX (03)3233-7217 大阪 TEL (06) 6614-8110 FAX (06)6614-8463

選手強化
キャンペーン

JOC S-001



全日本大学ソフトボール連盟

「ウインドミル」第4号発刊によせて

ごあいさつ



全日本大学ソフトボール連盟会長
大内敬哉

学連機関誌「ウインドミル」の第4号が発刊されることになり、誠に喜びに耐えられません。ご寄稿いただいた方々や編集にご尽力賜りました委員の先生方に深く感謝申し上げます。

さて、1997年に、学連の諸活動を記録に留めるとともに、ソフトボールに関する情報や研究論文を紹介することによって、学連の活動や大学ソフトボールの普及発展に寄与できたらという思いで、本誌は発刊の運びとなりました。これが予想以上に各方面より好評を得て今日に至っております。今後とも尚一層の努力を惜しまず、ソフトボール界に貢献できればと存じております。

また、21世紀のわが国の社会は、より専門的な情報といえども、ますますその量を増し、進展していくものと考えられます。居ながらにして世界の情報を入手し、リアルタイムで語り合う時代になってきました。問われるのはその質です。

この学連機関誌が国際的な情報基地としても発展していくよう祈念し、第4号発刊のご挨拶といたします。

ウインドミル

第4号

目 次

ごあいさつ●「ウインドミル」第4号発刊によせて	1
会長 大内敬哉	
〔巻頭言〕●地域社会と大学ソフトボール	4
副会長 一谷宣宏	
〔研究資料〕●スポーツ指導を考える ～増淵まり子選手へのインタビューを通して～	5
久保田豊司・森田啓之	
〔特別寄稿〕●世界選手権準優勝に輝いて	11
宮平永義	
●ソフトボールの「指導」について考える ～競技生活を終えて～	14
岡本伊都子	
〔提言〕●みんなの役に立つ実践研究を進めるために ～何を書けばヒントになりやすいか（試案）～	16
森田啓之	
〔問題提起〕●大学ソフトボール男子選手の試合姿勢	20
紅林和博	
〔事例報告〕●年間練習計画 ～神戸親和女子大学ソフトボール部～	22
島田佳代子・但哲哉尾	
〔研究紹介〕●最近の研究報告から指導に役立つこと（1）	25
末井健作	
●ソフトボール投手の尺骨疲労骨折 ～投球時の直達外力との関連について～	27
清水卓也・三浦隆行	
〔報告〕●平成12年度の事業報告と今後の課題	31
理事長 末井健作	
●女子選抜チームオーストラリア遠征	32
全国大会の記録●文部大臣杯第35回全日本大学選手権大会	47
●第27回全日本大学男子・女子東西対抗	53
●第6回全日本女子短期大学大会	55
●第15回東日本大学選手権大会	56
●第32回西日本大学選手権大会	58

	●第46回全日本総合男子選手権大会	-----	60
	●第51回全日本総合女子選手権大会	-----	61
各地区の大会結果●北海道・東北地区	春季大会	-----	62
	秋季大会	-----	63
●関東地区	春季大会	-----	64
	秋季大会	-----	67
●北信越地区	春季大会	-----	69
	秋季大会	-----	70
●東京地区	春季大会	-----	73
	秋季大会	-----	76
●東海地区	春季大会	-----	78
	秋季大会	-----	81
●近畿地区	春季大会	-----	86
	秋季大会	-----	92
●中国地区	春季大会	-----	98
●四国地区	春季大会	-----	100
	秋季大会	-----	102
●九州地区	春季大会	-----	104
調査・研究委員会から●第4号の編集について	-----		106
	森田啓之		
	●原稿並びに研究企画などの募集	-----	106
	●投稿規定・執筆要項	-----	107
広報・記録委員会から●インターネットホームページ開設	-----		108
	●東西対抗に代わる全国大会の新設について	-----	109
	●平成12年度連盟表彰	-----	110
資料●全日本大学ソフトボール連盟役員名簿	-----		111
	●平成12年度加盟大学一覧	-----	115
編集後記	-----		117

【巻頭言】 地域社会と大学ソフトボール

副会長 一谷 宣宏

社会の高度情報化と少子化・高齢化の進展により社会構造と生活様式が大きく変わり、社会に大きな恩恵をもたらすと同時に、「生活習慣病」、「こころの病」に代表される現代病や高齢化をめぐる「生きがいの喪失」、学校における「いじめ」、乳幼児の「虐待」など現代社会でクローズアップされる問題はますます深刻化しています。

こうした現代社会において、スポーツは人間の身体・精神・社会的健康の保持増進に欠かせないものであり、体を動かすという人間の本質的な欲求にこたえ、爽快感、達成感、他者との連帯感という心身の健全な発達を促し、活力ある社会形成に資するものであります。特に高齢化の急速な進展や、生活の利便性の追求により体を動かす機会の減少が予想される21世紀の社会において、一人一人がライフステージに応じたスポーツを楽しむことのできる豊かなスポーツライフを送ることは大きな意義があると考えます。

数あるスポーツの中で、ソフトボールは「競技スポーツ」と「健康スポーツ」の両面から人々に支持され、生涯楽しむことのできるスポーツの一つです。

そういう意味では、全日本大学ソフトボール連盟は歴史的には「競技ソフトボール」の進展と普及に寄与してきましたが、広く捉えると、生涯スポーツを支える役割も同時に担っています。

そこで、21世紀を迎えるにあたり、文部省の保健体育審議会答申の中にもある、大学施設を基盤とする学生と住民とからなる新しいタイプの「総合型スポーツクラブ」構想の実現を大学ソフトボール界においても21世紀のビジョンの一つにするべきであると考えます。

大学ソフトボールが地域に開かれ、子供から高齢者まで、初心者からトップレベルの競技者まで、地域の誰もが年齢や技能レベル、興味・関心など目的に応じて生涯ソフトボールを楽しめるクラブ組織を大学と地域が一緒になって運営し、地域交流、世代間交流を積極的に推進することは、学生と地域住民、住民相互の新たなコミュニケーションと連携を促進し、現代社会が抱えている問題を地域とともに克服し、さらには高等教育にも求められている学生のボランティア活動や社会でのインターンシップの実践が大学ソフトボールを通じて実現させることができると考えます。

確かに、生涯スポーツ社会の実現、地域におけるスポーツ環境の整備に大学ソフトボールがどのように貢献していくかについては様々な問題がありますが、大学連盟、各地区の連盟、大学のチームがそれぞれの運営において、「生涯スポーツ」、「地域社会との連携」、「ボランティア」をキーワードにして、実現できる方策を一つずつ積み重ねていけば、近い将来必ず目標に近づけると信じています。

【研究資料】スポーツ指導を考える ～増淵まり子選手へのインタビューを通して～

久保田豊司（大阪国際女子大学）

森田啓之（兵庫教育大学）

はじめに

20世紀最後の祭典、シドニーオリンピック。その大きな舞台で女子ソフトボール日本代表チームは見事銀メダルを獲得した。メダル獲得は代表選手全員の頑張りもさることながら、準決勝、決勝に先発投手として出場した増淵まり子選手の好投抜きには考えられないであろう。今回、代表選手の中に唯一大学生として選ばれた増淵選手と、短い時間ながら対談する機会を得た。前回のウインドミル3号では、アトランタに続きシドニーでも活躍した日本代表高山樹里選手のインタビューを通して、大学・短期大学の部活動の在り方について考えてみた。今回は、出来る限りインタビューの全てを紹介し、増淵選手が歩んできたソフトボール部活動を通して、「教える側」と「教わる側」、すなわち指導者と選手、それぞれがもう一度自分自身を振り返り、スポーツ指導のあり方について考えてみたい。

対談の目的は、前回に続きソフトボールの普及・発展に寄与する内容の構築である。今回は、オリンピックで登板した増淵選手の試合での心理状態、ピッチャーを始めた頃から現在に至るまでの投球技術獲得のプロセスなど、指導者・選手が参考になると思われる点を中心に幅広く意見を伺ってみた。

増淵選手とのインタビュー

——：シドニーオリンピックでは大活躍でしたね。コンディショニングの調整など大変な苦労もあったと思いますが、まずはオリンピックの感想を聞かせて下さい。

増淵：オリンピック全体では、それほど印象に残っていません。ソフトボールの事しかないですけど、このチームでプレイできたことが凄く良かったです。チームワークがありました。

——：どういった所でチームワークの良さを感じたのですか？

増淵：本当に団結力があるというか、まとまったチームで自分の中では正直、本当に最高でした。私が一番年下ですが、上の人にも気を使わずいい意味で充実していました。

——：チームの団結力は、たくさん行われた合宿の中から生まれたものだと思いますか？

増淵：はい、合宿を重ねる中でどんどんチームがまとまったと思います。

——：寝食を共にすると、いろんな形で話をする機会も多くなりお互いの理解を深めることができますね。

増淵：朝から晩まで、一緒に過ごすことでその人のすべてが見えてくるというか、監督からも「他人の事をよく知って自分の事を知ってもらえ」と合宿で言われてきました。そういうことも全て出来たと思います。人の事を知ることも出来たし、自分の事も知ってもらえることが出来て、それで凄くいいチームが出来たと思いました。

——：お互いを知るのにいい合宿、いい遠征が行われたということですね。

増淵：はい、そうです。

——：オリンピックで戦ってきたチームの印象はどうでしたか？特に、決勝トーナメントを中心に感想を聞かせて下さい。

増淵：やっぱり打席に立ったときの目の色が違います。普段、選手村で会った時の表情と打席に立ったり守備についたりした時の表情が違いました。勝負に対する執念、そういうものを強く感じやっぱり凄いと思いました。特に、投げていて打者が打席に入り、投手に向かって構えた時に集中力の凄さを感じました。

——：これから世界に向かって日本の選手が戦っていくには、どのような部分を伸ばせば良いと思いますか？ピッチャーに限ると、スピードなのか、コントロールなのか、あるいは他のものなのか、実際、自分が投げてみて世界に勝つにはまずこれとこれは必要だと思うものは何ですか。

増淵：精神力ではないでしょうか。

——：「気持ち」が、一番重要だと言うことですね。

増淵：ソフトボールは10日間ぐらい試合が続くじゃないですか。その期間中ずっと持続できる集中力がとても大事だと思いました。技術面では偉そうには言えませんが、今回みたいにチームワーク・打力・守備力・投手力があり、ピッチャーが変化球とか緩急を使いわけて投げれば世界で戦っていけると思います。

——：世界で戦っていくには、バッティングに関してはパワーが必要ですか？

増淵：パワーも必要だと思いますが、それだけでなく田本さんのバッティングを見ているとタイミングも重要であると思います。

——：バッティングに関しては、まずはタイミングそのあとにパワーですね。

増淵：そうだと思います。タイミングを合わせないと、ボールに当たらないですから。

——：ピッチングについてですが、試合では主にインコースを攻めていましたね？

増淵：はい、攻めていました。とりあえず、打者に対しては強気で攻めていこうと思っていました。強気で攻める気持ちが、結果的にインコース主体のピッチングになったと思います。

——：強気で攻めるピッチングがインコースですか？

増淵：それもありますが、キャッチャーもインコースを要求していましたから。

——：キャッチャーとの阿吽の呼吸もあったのですね。これまでの国際試合で諸外国のデータは持っていたのですか？

増淵：データは持っています。但し、データに全部頼るのではなく参考程度にしています。

——：打者に対して細かいところの攻め方はどうでしたか？

増淵：細かい点は実際に試合をやってみないと分からないので、その中でピッチングの組み立てを考えていました。

——：話は変わりますが、増淵さんの小学校時代はどんなスポーツ、どんな遊びをしていたのですか？

増淵：小学4・5・6年とバレーボールをやっていました。また、遊びでは高い所から飛び降りたりして、親にいつも心配をかけていました。

——：小学校低学年の頃はどうでしたか？

増淵：男の子にまじって遊んでいました。サッカーはよくしましたね。

——：小学校時代はいろんな遊びをして、4年生あたりからバレーボールを始めたということですが、ソフトボールはいつ頃から始めたのですか？

増淵：中学から始めました。最初はピッチャーには全然あこがれてなくて、ショートとか野手をやりたくてソフトボールをしていました。中学2年生になると先生からピッチャーをやってみると言われ試合で投げてみると、全然やったこともないのにある程度投げることができ、先生に「球、速いな」と言われそれからピッチャーをやっています。自分はやりたくないと言って、ずっと断っていました。

——：ピッチャーの人は、だいたい誰かに言われて始めていますね。最初から、ピッチャーをしたいとは思わないのですかね。高山選手（豊田自動織機）も、大学卒業時にそんなことを話していましたね。

増淵：自分は、野手がやりたかったです。

——：中学、高校といろんなことを教わったと思いますが、教えてもらったことで自分なりに考える余裕とかありましたか？

増淵：全然ないです。本当に教わる事をひたすら一生懸命全部やる、教わったことを自分の中で出来るようになっていく感じで練習をしていました。

——：例えば、いろんな技術練習をやられたでしょうが、どのような練習が自分の中で良かったと思いますか？

増淵：中学時代はピッチング練習とかじゃなく、鉄棒を飛び越えないと試合に行けないとか、変わったことばかりやっていた印象があります。

——：高校に入学してからはどうですか？

増淵：まず、岡部先生との出会いで、自分のピッチングが大きく変わったと思います。

——：どんな練習が印象に残っていますか？

増淵：基本練習です。とにかく、縦回転のストレートが投げられるように、ひたすら練習していました。

——：縦回転のストレートの練習ばかりですか？

増淵：はい、それを徹底的に練習していました。それから、変化球の投げる練習です。

——：高校から大学に入学し考える余裕も出来たと思いますが、自分が経験している大学ソフトボールの印象を聞かせて下さい？

増淵：大学でも指導者がいますが、自分自身に厳しくないで大学ではやっていけないと思います。自分自身で考えてやればやっただけ結果が出てきますが、そうでないと答えが出にくいと思います。自分自身で出来る人と出来ない人、その差が技術の伸び率に影響しているのではないですか。

——：自分自身で出来る人と出来ない人ですか。

増淵：自分自身でやらなければいけないのが大学だと思います。

——：具体的に高校との違いはどこにありますか？

増淵：高校は自分でメニューを考えない先生の指示待ちで、大学（自分の場合）になると自分でメニューを考えて自分自身でやる練習です。インターハイに出場するような高校でも、自分自身でやっていないように見えます。

——：自分自身で出来ないで大学もしくは実業団に行っても通用しないと思いますか？

増淵：通用しないと思います。結局、自分の弱い所が見えてこないと、それを克服する練習も出来ないですから。

——：自分には何が足りないのか。自分に必要なものを試行錯誤しながら探せるのが大学の良さですね。

増淵：自分自身が本当にやらないと、自分の望む答えを得ることが出来ないと思います。また、大学ではスポーツ分野の専門の先生がおり、栄養学とかトレーニングなどソフトボールに必要な知識がいつでも聞けるのがいいですね。

——：トレーニングの仕方や食事の仕方など、スポーツに必要な勉強ができるのも大学の特徴ですね。

増淵：それぞれの分野における専門の先生が居られることが大きいですね。

——：ソフトボールの技術習得に関することですが、自分が上手になったと感じた時は？

増淵：正直言って、上手になったと感じたことはないですね。

——：以前より少し技術が伸びたと感じた時は？

増淵：練習していることが試合で通用した時です。

——：練習した成果が試合で出せた時ですね。

増淵：はいそうです。

——：速い球を投げるのに、自分の中で球が速くなる「コツ」といったものがありますか？

増淵：とにかく、もっともっと速くという気持ちで投げています。

——：腕を早く回すことは意識しないですか？

増淵：腕を早く回すことも意識します。自分のフォームですが、最初は力を抜いて最後のリリースで力が入るように意識しています。最初から力を入れると、スムーズに腕が回らないですから。

——：ボールリリース時、ボールに対して指のかかりがありますよね。球種の違いで、指のかかりの意識も変わりますか？

増淵：指のかかり方は意識します。ライズだったら人指し指にかけるというか、はじく感じですね。ストレートはかけるですね。

——：ライズ・ドロップ・チェンジアップなどの変化球は、試行錯誤しながら投げる練習をして自分の形というのが出来たのですか？

増淵：人の助けもありますが、自分の納得したボールを投げる事が出来るまで、そのタイミングを自分の体で覚えるまで投球練習します。よく、どの部分に当ててるのですか？と聞かれますが、自分自身の体が覚えていることなので、口では表現出来ないのです。

——：当てるという意識はないのですね。

増淵：そうですね、体が自然に覚えている感じです。

——：体が覚えるまで大体どのぐらい投げますか？

増淵：多いときで200球以上投げます。

——：毎日ですか？

増淵：体が覚えるまで結構練習します。それ以外は、自分自身の中で今日はこれをやろうとテーマを決めて考えながら練習しています。

——：ボールの握りは工夫していますか？

増淵：握りは変えたりします。これは握りやすい、これは握りにくいがボールの回転はいとか工夫しながら投げています。

——：基本的なボールの握り方を教えてもらった後に、自分なりに工夫しているのですね。

増淵：自分に合ったのが一番投げやすいです。

——：アトランタの時に高山さん・藤本さん・持田さんに学連で報告会をしてもらったのですが、3人とも言ったことが「日本選手は試合の時疲れていた」と、試合前に朝からガンガン練習をやっていて、あれでは日本選手は戦えなかったと強く言われていました。指導者が変わらなければいけない、素晴らしいことを彼女らは言っていました。増淵さんはどうでしたか？

増淵：ある程度任されて練習していたので、ベストな状態で試合に臨めました。

——：筋力トレーニングなどは、シーズン中でもやっていますか？

増淵：体幹のトレーニングは毎日しています。上肢・下肢については、休みを入れながら交互にトレーニングをしています。

——：新聞などで試合では緊張しないとっていますが、何故緊張しないのですか？

増淵：試合で投げる事が出来るのは一人だけで、その一人が自分であれば緊張ではなく喜びを感じて投げています。また、ピンチの場面では楽しんで投げています。ピンチの場面で投げる事が多かったので、ピンチの方が自分のピッチングが出来ます。決して自分で見せ場は作っていません。

——：オリンピックでは、投げる際に宇津木監督からは何か言われていましたか？

増淵：「自分らしく投げろ」と言われていました。

——：最後に、ピッチャーを始めた人に速くボールを投げるポイントは？と聞かれたら、どう答えますか。

増淵：基本ができるまでは、ひたすら投げます。中学時代は、学校で投げて家に帰っても投げていました。投げるタイミングが合わずフォームがバラバラだとボールも散らばり、ある程度フォームが固定しスムーズな動きが身に付くまでは繰り返し練習して下さいと答えます。

——：忙しい中、インタビューに答えて下さりありがとうございました。

増淵：ありがとうございました。

「教える側」と「教わる側」——運動技術獲得に焦点づけて——

今回のインタビューを通して、教える側と教わる側への示唆として以下のような見方ができるのではないだろうか。

教える側は、その種目に十分な実技能力を持っているか、あるいは過去にかなりの専門的なトレーニングをした経験のある人が一般的に多い。この中には、自分の経験だけに基づいた指導が中心となり、その結果、部活動における勝利至上主義、バーンアウトやドロップアウトなどの様々な問題を引き起こしている場合も少なからず存在する。いわゆる、「名選手必ずしも名監督にあらず」といわれる所以でもある。指導者は、ただその運動が上手に出来るというだけでなく、その運動の技術や指導方法について科学的に裏づけされた専門的な知識を豊富に持っていること、持とうと研鑽することが望まれるのである。そして、科学的な指導法とは別に、目標に向かって進む中、その過程で嬉しさや悔しさなど

を選手と一緒に共感することも大切なことである。一方、教わる側は、練習さえ参加しておけば何とかなるだろうと考えたりあるいは、レベルの高いプレーばかり追い求め、運動技術獲得に必要である目の前の基本練習が、全く置き去りにされているのではないだろうか。理想ばかり追い求めているも、基本が出来ていなければ、自分が目標とする高度な技術を獲得することは出来ない。そうなるに練習していても面白くなり、途中で諦めてしまうのではないだろうか。高い山を登るには、一步一步着実にステップを踏んで前へ進んでいくことが必要である。一流競技者といわれている人も、いきなり上手になったわけではなく、一步一步「自分なりのプレー」を考えながら着実に前へ進んだ結果である。

このように、教える側と教わる側、大まかであるがひとつの見方を描き出してみた。これからは、それぞれの立場・現状をどう認識するかにより、スポーツ指導の本来的あり方（指導者としての、教わるものとしての）が見えてくるのではないだろうか。

※バーンアウト（燃え尽き症候群）、ドロップアウト（チームや競技自体からの離脱）

おわりに

増淵選手の競技力は、持って生まれた身体的資質だけでなく、向上心とたゆまぬ努力により築き上げられたものである。投球動作を獲得した中学時代、基本を繰り返し徹底的に練習し競技力を高めた高校時代、そして自分なりに創意工夫しピッチングの完成度を高めた大学での競技生活と、節目節目で指導者との出会いにより成長している増淵選手が感じられた。教える側と教わる側という車の両輪のように、一体となって前へ進むことが改めて大切だと痛感した。



【特別寄稿】 世界選手権準優勝に輝いて

宮平 永義（沖縄県立中部工業高校）

1992年、日体大3年の時、世界選手権大会に参加する機会をもらった。ソフトボールに携わって十数年、始めたのは兄の影響からという単純なきっかけからソフトボールの魅力にはまっていった。決して上背のあるわけでもなく、飛び抜けた素質があったわけでもない。ただやるからには誰にも負けたくないという思いと、他の選手より絶対沢山練習していたという結果が、このような機会を与えてくれたのだろうと思う。

さて、初めて参加した世界選手権（フィリピン・マニラ）、緊張した面持ちで臨んだ大会であったが、世界との差、自らの実力のなさ未熟さを痛感させられた。そして、経験のない自分は試合に出場した回数も少なく、いろいろな面において屈辱を味わった。

1996年、再び大舞台に立つ機会をもらった。前回の屈辱を挽回するため、チーム一丸となり、その結果初の3位入賞を果たした。米国ミシガン州ミッドランド市での「エッサッサ」は今でも忘れられない。幾度も国内外で合宿を行い、総合力を高めた結果が世界の三強（ニュージーランド・カナダ・アメリカ）の一角、アメリカを敗つての3位入賞であった。しかし、これだけ練習・強化合宿をこなし、苦勞を重ねて勝ち取ったにもかかわらず、日本での情報・報道は皆無に等しかった。この年はオリンピックの年、正式種目になった女子はともかく、話題はメジャーな種目に目が向けられていた。男子ソフトボールは厳しい状況にあった。

20世紀最後の世界選手権大会（南アフリカ）、2年間に及ぶ選考会、若手とベテランとの世代交代の中、どうにか出場することができた。年齢的にも最後の大会という気持ちだった。ソフトボールを始めて最初の目標は日本一、そして全日本選手、それらが達成された今、さらに世界の頂点へを掲げて臨んだ大会であった。

今大会は各国とも予選を経てきたこともあり、ハイレベルな大会であった。予想通り、過去にも苦戦しているベネズエラに1対0と思わぬ敗戦を喫してしまった。しかし、スタッフ・選手が気持ちを切り替えた結果、破竹の6連勝、予選最終戦では難敵カナダを1対0で始めて全日本が敗った（この時点で予選は2位で通過）。この勢いに乗った全日本は、決勝トーナメントAパート1位のニュージーランドと対戦、幾度と対戦を重ねてきた相手だけにやりにくいチーム、しかし波に乗っている全日本は1対0でこれを敗る快挙。続く準決勝戦でもアメリカを2対0で敗り、世界の三強を全て敗る躍進で決勝進出を決めた。

決勝戦、やはり相手は敗者復活戦から勝ち上がってきたディフェンディングチャンピオンのニュージーランドであった。全日本は予選・決勝ラウンドの勢いで先行するものの、打力で優るニュージーランドは、ホームランを含め2対1と逆転、そのまま逃げ切られて2連覇を達成されてしまうとともに、世界チャンピオンという大魚を逃してしまった。

しかし、全日本チームは史上初の準優勝という歴史的偉業を達成することができたと思う。この8年間、3度の世界選手権大会に参加でき、最初は右も左も分からないまま過ぎ去り、世界との差を見せつけられ屈辱を味わったこと、年を重ねて練習・試合をこなし、追いつけ追い越せで我武者羅でやってきた8年間の想いが浮かぶと自然に涙が出てきた。

今まで溜め込んできた苦しさと喜びの入り混んだ銀メダル、私にとってはソフトボール人生の集大成、一番重みのある大切なものを手にすることができた。

ところがである。前回の大会でもそうだったが、今回の世界2位の報道は、一部の人たちにしか伝わらなかった。なぜだろうと疑問に思う。マイナーだから、オリンピックの種目でないから取り上げてくれないのだろうか？ マイナーな競技はいくら努力、頑張っても成果を残してもこんなもんなのだろうか。同じ種目なのにこれだけの差がついてしまうとやる気も失せるし、競技人口（人気）も減るのではないだろうか。私としては、どうか男子にも目を向けて、早くオリンピック種目として取り上げてほしいものだと思う。これからの選手達に希望と夢のある舞台を作ってほしいと切に願います。

私はこれからも一選手・一指導者としてソフトボールに携わっていくつもりです。後輩諸君の奮闘に期待します。私たちが取り逃がした大魚をぜひ日本に持ち帰ってください。

第10回世界男子ソフトボール選手権大会参加選手

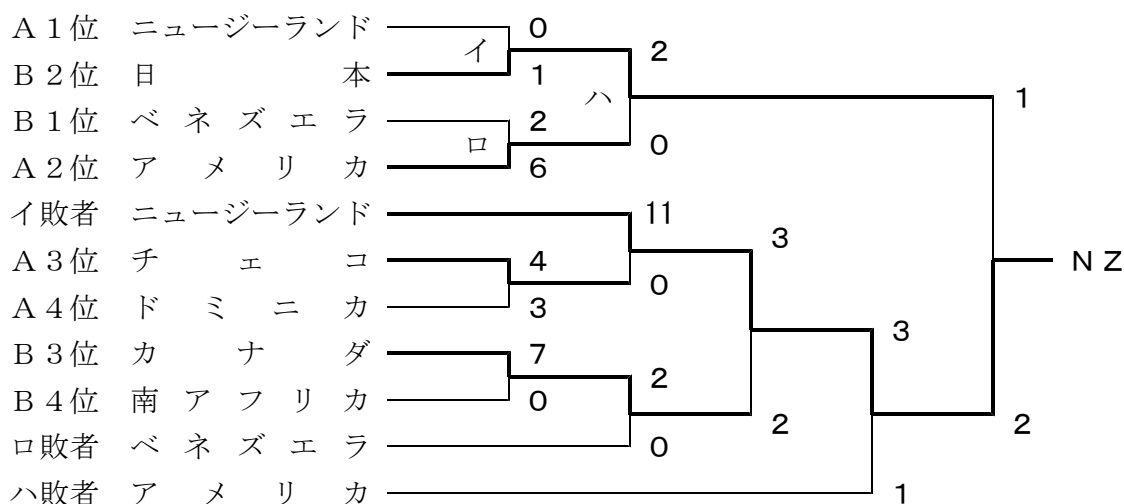
背番号	守備	氏名	所属	出身大学
20	投手	西村信紀	闘犬センター	
26	投手	宮平永義	沖縄コザスポーツ	日本体育大学
25	投手	大木彰人	闘犬センター	中京大学
11	投手	天野充敏	USC浦安	京都産業大学
16	投手	飯田邦彦	日新製鋼	神戸学院大学
14	投手	馬場智久	ツヅキグローバル	京都産業大学
22	捕手	山崎泰稔	闘犬センター	
2	捕手	由良隆年	ツヅキグローバル	京都産業大学
10	一塁手	岡本友章	闘犬センター	
6	二塁手	荒木貴則	日新製鋼	
8	三塁手	江口真史	闘犬センター	
4	遊撃手	笹岡裕之	闘犬センター	東海大学
27	遊撃手	小笠原毅	トヨタ自動車	
9	外野手	梅下住裕	闘犬センター	日本体育大学
3	外野手	有住隆	山形県庁	日本体育大学
7	外野手	井上聡	闘犬センター	
1	外野手	西田繁幸	闘犬センター	

【試合結果】

予選リーグBグループ

チーム名	日 本	A U S	カナダ	オラン	台 湾	ベネズ	ボツア	ドミニ
日 本	*	○ 5-1	○ 1-0	○ 6-2	○ 5-2	● 0-1	○ 5-0	○ 6-2
オーストラリア	● 1-5	*	○ 3-2	○ 9-2	○ 5-1	● 1-10	● 0-3	● 2-3
カ ナ ダ	● 0-1	● 2-3	*	○ 14-0	○ 10-0	○ 3-0	○ 4-1	○ 5-0
オランダ	● 2-9	● 2-9	● 0-14	*	○ 6-5	● 1-5	● 0-1	● 0-10
台 湾	● 0-5	● 1-5	● 0-10	● 5-6	*	● 0-3	● 0-2	● 2-4
ベネズエラ	○ 1-0	○ 10-1	● 0-3	○ 5-1	○ 3-0	*	○ 3-0	○ 4-2
ボツアナ	● 0-5	○ 3-0	● 1-4	○ 1-0	○ 2-0	● 0-3	*	● 0-2
ドミニカ	● 2-6	○ 3-2	● 0-5	○ 10-0	○ 4-2	● 2-4	○ 2-0	*

決勝トーナメント



【編集部】

オリンピックイヤーの今年、何といても全日本女子チームの銀メダルは球史に残る快挙でした。しかし、その陰になってしまい、第10回世界選手権大会において史上初の準優勝に輝いた男子チームの快挙がかすんでしまったのは誠に残念です。大会は7月7日から15日まで、南アフリカのイーストロンドン、バンカーズヒルソフトボール場で開催されました。参加した全日本チームの選手17名のうち、過半数の9名は学連のOBです。宮平先輩は3大会連続、大木・梅下・有住各先輩は2大会連続の出場です。卒業後も各地で頑張っている先輩各位に対し、敬意を込めてここにご紹介し、現役諸君の奮起を促します。

なお、この大会の団長を務められた艸田聰氏（愛知県ソフトボール協会理事長）によれば、ドン・ポーター国際ソフトボール連盟会長に「男子ソフトボールをメジャースポーツに」と強く働きかけたところ、2008年のオリンピックが大阪か北京で開催されれば、「オリンピックの正式種目にしたい。」との回答を得られたそうです。

【特別寄稿】

「指導」について考える
～競技生活を終えて～

岡 本 伊都子

略 歴 1972年1月1日生（28歳）
中 学 加茂町立泉川中学校卒業（京都府）
高 校 宇治高等学校卒業（京都府）
大 学 園田学園女子大学卒業（兵庫県）
実業団 （株）豊田自動織機製作所（愛知県）

全国の大学ソフトボール関係の皆様、初めまして。元・豊田自動織機製作所ソフトボール部所属の岡本と申します。今回、競技生活を終えた者として後進のために何か書いてほしいというお話をいただきました。限られた私の経験の中ではありますが、これまで指導を受けてきた立場から見た「指導のあり方」について考えてみたいと思います。その意味で、主観の部分がかかなりあることを始めにお断りしておきます。

1. 「指導」の多様性と選手の個性

ソフトボールはかつてに比べて競技人口が多くなった現在、様々な指導の仕方が存在していますが、率直に言いますと、一概に「この指導は…」とは言えないと考えています。バッティング理論にしろ、チームによって指導の仕方が違います。私は、それでいいのではないかと思っています。チームにはチームのやり方がありますから、自分に「合う・合わない」は当然出てきますが、その中で選手が自分に合った理想のバッティングに近づけていけばいいんじゃないでしょうか。まず、選手自身がその意識を持つことが大切です。一方で指導的な立場で言えば、間違っていけないのは、指導者の無理強いだと思います。指導者のエゴで潰れていく選手をこれまでにたくさん見てきました。先に述べましたが、強い意志を持ち、自分でバッティングを研究するような選手であれば、指導者は黙って選手を見ているのも指導の一つの手だてではないでしょうか？選手が今、何を求めているのか、今どんなアドバイスがほしいのかを判断するのも指導者の大切な役目だと考えています。バッティングは、本当に奥が深いものです。選手のセンス、パワー等をいろいろな角度から見て、選手に合ったバッティングを指導していかなければなりません。

私も何度か、講習会に参加し指導をさせていただいたことがあります。その際、私は指導を行う前に必ず、「これがすべてではありませんから」と前置きしてからスタートします。なぜ、そのような表現をするのかと言うと、チームの監督さんのいうことも決して間違っていないからです。最初にも述べましたが、チームにはチームとしてのビジョンや構想があったうえで、個々の指導の仕方が位置づきます。したがって、私の指導の仕方は、基本練習から入り、一人一人のスイングを見て一言、二言アドバイスを送るぐらいにしています。教えすぎず、型にはめさせないように気を配っています。選手自身に考えさせ研

究心を持たせることは、視野が広がり、ソフトボールの奥深さを知ることができ、面白みが出てくるのではないのでしょうか。

2. 日本とアメリカの指導の違い、そして、これからの指導に期待すること

次に少し視点を変えて、日本とアメリカの指導のありよう（現状）について少し話をしたいと思います。

豊田自動織機製作所には、アメリカ人が3人（コーチ1人、選手2人）います。出身が全く異なる選手が同じチームでプレイしているという関係で、日本とアメリカの指導についてよく話をします。3人は、「日本の監督は厳しいだけで、決して誉めない。アメリカの指導は期待するからすごく厳しいが、厳しいと誉めるのバランスがある。」と言います。「日本の監督は誉めることができないのですか？」と聞かれることもありました。また、日本の監督は怖いというイメージがあり、監督の顔を見て試合をしている選手が多いと感じるそうです。このような感想は、3人が日本でプレーするようになっていろいろなチームを見て感じたものであって、日本のやり方が悪くてアメリカのやり方はいいとか一概に言えるものでもないと思います。ただ、日本の指導の仕方には「押し付け」が入っているように思える部分もあります。例えば、アメリカではバッティングで重視するポイントは、強くスイングすること、つまり、パワーのあるスイングすることだけだと言います。フォームがどんな形であれ、いいポイントでスイングすることだけを指導されるようです。それに対して、日本の場合はどうでしょうか？この例など典型ですが、これまで多くの指導者に関わって、あるいは見てきた選手の一人として指導者側に望むのは、個々の選手の力を発揮できるような、個性を引き出すような指導をしてほしいということです。

3. まとめとして

選手はソフトボールする場所を求め、自分に合った環境、指導者を探し、期待してチームに入ります。選手からみた良いチームとは、指導者と選手との意思疎通ができるチームです。最近では、自分の気持ちを出さない選手が多いようにも思いますが、選手の性格を見抜き一対一で話せる環境作りをしていくことが必要だと思います。幸いにも、ソフトボールは、他の集団スポーツに比べて、「個人」の技能を上げる・技を磨くことが「チーム」としてのパフォーマンスにかなり影響する種目です。つまり、試合をしているとき（ボールを打つ時、受ける時、投げる時など）は、基本的にいつも一人でプレーをこなさないといけないわけです。その意味では、個人がまず先なんだと思います。したがって、練習の仕方も個々に応じて、かなり工夫しやすいのではないのでしょうか。一対一で話す場を増やすことその選手の考え方や求めるものが分かると同時に力の見極めもできますし、選手に監督の考えも浸透していくんじゃないのでしょうか。選手は、指導者の行動・言動をよく見聞しており、指導者と選手の信頼関係がチームとしての成功に大きく関係するといっても過言ではないでしょう。そのように個人（個性）を大切にするというプロセスを大切にしたい指導がこれから広がることを期待しています。

【提言】 みんなの役に立つ実践研究を進めるために —何を書けばヒントになりやすいか（試案）—

森田啓之（兵庫教育大学）

1. はじめに

一昨年ウインドミル第2号で、松永尚久氏は〈総説〉『野球型スポーツに関する研究の動向』の中で、「研究成果が指導現場で役立つ研究」が今後期待されると述べた。そして、「このような特徴を持った子にこんな指導をしたらこのように変わった」とか、「このような欠点を持った子にこんな指導をしたらこうなりました」とか、「こういう時には、こんな言葉を使うと分かりやすいらしい」といった例を挙げている。筆者も〈編集後記〉において、「実践」を対象とする研究とは？ということが問い直されている現状から同感の意を表明しつつ、そのうえで、今後このイメージをさらに具体化し、共有財産化していくための方法論について提案がなされるよう希望した。

ところで、「共有財産化」にはどのような条件が必要とされるだろうか。ここで、指導の実際をイメージしてみよう。教える対象であるプレイヤーはそれぞれ違った個性を持っている〔個性的存在〕にもかかわらず、一般には、練習効果を急ぐあまりに、個別性を軽視して、どこかのテキストにあるものを一斉に「あてはめる」指導が多いのではないだろうか。俗っぽく表現すれば、これは「サルマネ」に等しいことにもなる。ソフトボールだけでなく、スポーツ指導全体における悪しき慣習かもしれない。なぜこうになってしまうのかを考えてみると、勿論そのテキストを鵜呑みにする読み手の問題がまず指摘されるが、それをヒントとして使うという発想を可能にする提示のされ方がなされていないという点にも原因があると思われる。したがって、同じプレイヤーは存在しないことを了解した上で、読み手がその実践をヒントにできるような「一定の視点を持った提示の仕方」が必要になってくるのではないだろうか。

そこで、本稿では松永氏の提案を一步でも進めて議論の突破口にするため、みんなの役に立つ実践研究では、何について書けばヒントになりやすいかについての提示を試みたい。

2. ヒントになりやすい実践研究では何を書くべきか？

トレーニングは「体力的なものだけでなく、技術的なもの、戦術的なもの、メンタル的なもの等を向上させようとする行為の総称」であり、指導・練習はトレーニングそのものになる。そうすると、指導者はトレーナーであると言い換えてもよいだろう。そして、指導者である限りは、「プレイヤーをよくしたい」という思いを込めて、図1のような手順で日々悪戦苦闘しているはずであろう。そうすると、手順の各段階で行う作業について互いが報告し合えば、それを見た指導者たちはヒントにしやすくなるのではないだろうか。

以下、ヒントになりやすくするために、書くべきと考えられる事柄を順に示してみた。

(1) トレーニングは「個人」のものである

トレーニングをしていく場合には、注意すべき事項（トレーニングの原則）が存在する。その中でも、複数のプレイヤーに同じトレーニングを課しても効果には個人差が出てくる

点は重要である。というより、課してはならないといった方が妥当であろう。それは「個別性の原理」と呼ばれるものである。したがって、図1の手順を踏まえて指導する場合には、すべての段階で個人に応じることが重要になってくる。簡易に表現すれば、練習というトレーニングは、例え同じ練習を一斉にやるとしても、個別であるということになってくる。

(2) トレーニングを構成している段階を追って書く

1) プレイヤーの要望を書く

トレーナーの実践は、プレイヤー個人からの要望を聞くことから始まる。プレイヤーへ働き掛け（サポート）をする場合、そのプレイヤーが「どのようなプレイヤーになりたいのか」（『目標』）を把握することは不可欠なことである。その『目標』は個人によって異なるが、ソフトボールに限らず、プレイヤーとしての『目標』を生じさせる根源的な思いは次の2つのタイプに分類されよう。一つは、「トップアスリートを目指す」（以下「トップ型」と略す）、もう一つは「限られた期間でソフトボールを堪能したい」（以下「堪能型」と略す）である。なお、これは「勝つため」「楽しむため」という一般に理解される二分法と同様と捉えられるかもしれない。しかし、厳密には「トップ型」「堪能型」のどちらであっても、ソフトボールが課題達成型のスポーツである以上、ゲームを競う（勝とうとする）ことに変わりはないことを付け加えておきたい。

しかし、ソフトボールの根本的価値観であるこれらは、単純に二者択一で裁きうるものではないのも事実である。むしろ、最高学府である「大学という教育機関」におけるクラブということを考えれば、この多様性はむしろ尊重されなければならない。「トップ型」は技術の進歩や目標的存在として底辺の拡大に大きな意味をなし、「堪能型」は学校や地域社会における将来の指導者として、やがてはソフトボールの愛好者を増やすことにつながる。

このような目標を踏まえて、プレイヤー個人からは様々な課題（例えば、「長打を打てるようになりたい」など。これを『当面の課題』と呼んでおく）が出される。トレーナーはこれら目標と要望を明確にしなければ、その後の働き掛け（サポート）は適切でなくなるであろう。すなわち、プレイヤーの『目標』と『当面の課題』が合っているとかどうか（現実的に可能なのかを含めて）についてトレーナーは判断をした後、以下に続く作業では目標別に対応することになる。

2) プレイヤーの特性を書く

『目標』と『当面の課題』が対応すると判断できれば、トレーナーはプレイヤーの特性を診断することになる。例えば、「長打が打てるようになりたい」という『当面の課題』がプレイヤーから出されたとしよう。先の2つの目標のどちらの場合でも、「長打を打つには何が必要か」という観点でプレイヤーの診断が必要になるが、その診断は「体力→技

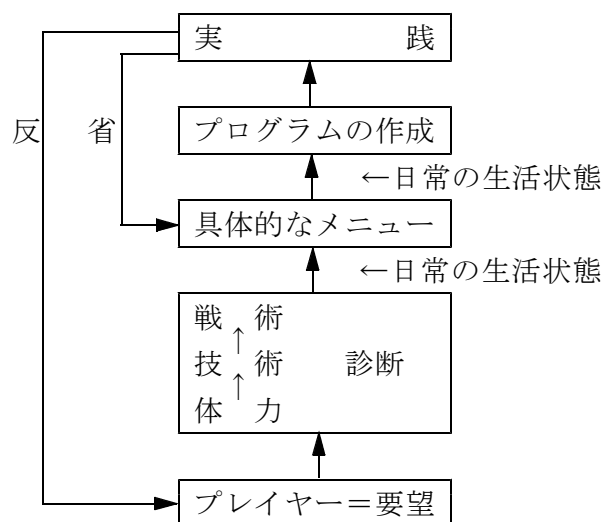


図1 トレーニングの構造

術→戦術^{注2)}」について実施する。

「トップ型」の場合、体力診断では長打を打てる体力バランスの底上げのために、どの部分をどの程度高めるかを明確にし、技術診断では培った体力を合理的に生かすフォームを習得するために、どこをどう修正するかを明確にし、戦術診断ではその修正されたフォームですべての投球に対処するためにはどうすればよいかを明確にする。つまり、「トップ型」の場合、一般に競技力の向上に上限がないとすれば、体力を基盤として3つのすべてについて不断のレベルアップを図る必要がある。なお、これに関わっては一般に多くの指導書が手助けとはなる。

それに対して、「堪能型」の場合、トレーナーはプレイヤーの『目標』と『当面の課題』を意識したうえで体力診断をし、プレイヤーのどの部分をどの程度高めなければならないかを明確にしなければならない。この次からが「トップ型」と異なり、「堪能型」では体力診断から得られたプレイヤーの特徴を「生かす」視点での技術診断から、どのようなフォームで打てば適切かを明確にし、戦術診断ではそのフォームが生きる戦術を明確にする。要するに、「堪能型」では、プレイヤーが持つ体力的特徴（長所）を生かすために必要なものを技術の側面と戦術の側面でそろえるという発想である。ここでは、これを敢えて「その個人の特徴を伸ばす」と表現しておく。バッティングフォームを例にとると、一般に指導書では、右打者なら左手中心で振ることとなっている。これは物理的の原則からみて合理的であるというのが大きな理由である。しかし、右手が強い（体力的特徴の）プレイヤーが、中心より右方向への打球をイメージして右手中心で振って、特徴を最大限に生かそうとするのも、「堪能する」ための一つの選択肢である。これが右手が強い場合に、右手中心で振る「個人の特徴を伸ばす」やり方^{注3)}である。

3) 具体的メニューとプログラムを書く

プレイヤーの特性の診断をして克服すべき事柄が明らかになってくれば、それを具体的メニューやプログラムに反映させる段階へと移る。ここでは、その人の日常の生活状態（運動量や栄養や休養など）が踏まえられなければならない。ただ、トレーニングプログラムを編成、実行するうえで最も大切な上記2)の段階が適切になされていれば、それに応じて既存の具体的メニューを使用したり組み合わせたりするだけで、極論すれば大きな問題はない段階である。先の診断に応じて、それらを使えばよいのである。こうして、最終的にプログラムは実行され、当初の要望に答え得たかどうかから反省的思考がなされる。まさにトレーニングはこの繰り返しなのである。

最後に、敢えて注意しなければならない点があるとすれば、「個別性」を忘れてはならないことである。指導書に則ってトレーニング（練習）しても、効果に個人差が出現すること、トレーニングの宿命としてプログラムは個別であるべきことを先に指摘した。しかし、現実を見渡すと、効率化の下で、一斉で統一のプログラムが多いように感じる（私を含めて）。これは、指導者の思いが最優先されている証でもあろうが、改善する必要があるだろう。

また、「トップ型」「堪能型」のどちらであっても「体力→技術→戦術」の各々におけるトレーニングが必要であることには変わりはないため、現象を見ればトレーニングする事柄は同じに見える場合も存在するだろう。しかし、両者の違いを極論すると、「トップ型」は「テキストに則った技術の習得」のためのプログラム編成、「堪能型」の場合は「そ

の個人の特徴を伸ばす」ためのプログラム編成ということになり、両者は明らかに異なった考え方に依拠したトレーニングなのである。この2つを区別せずにプレイヤーに働き掛けをしてきたことが、これまで指摘されているような多くの問題（例えば、燃え尽き症候群やドロップアウト現象）を引き起こすことにもつながっているのではないだろうか。

3. おわりに

ここまで、実践現場の指導にとってヒントになりやすくするために、書くべき事柄について述べてきた。要点を再度まとめれば、第一にそのプレイヤーがどのような要望を持っているのか、第二にそのプレイヤーはどのような特性を持っているのかを明確に示しておくことが必要である。従来はこの部分が不透明あるいは曖昧であったため、読み手は具体的プログラムをそのまま適用せざるを得なかったのではないだろうか。したがって、この第一、第二の点を記したうえで、「このような具体的メニューやプログラムを作成し、こう改善された」と報告することが不可欠である。この条件が報告に示されていれば、読み手である指導者は「うちのチームのあのプレイヤーに対応するかな？」というように、研究報告の内容を絞り込んで理解することができ、まさに自らの指導実践のヒントになりやすくなるのではないかと考える。

ところで、ソフトボールは先のシドニーオリンピック女子チームの大活躍によって、一躍脚光を浴びたが、これを一過性のものとすることなく、ソフトボールを普及・発展させていくためにどうすればよいかを考える必要がある。競技力〔日本としての〕の向上と同時に、ソフトボール人口の拡大にも積極的に取り組まねばならない。なぜなら、両者はある程度関連しているからである。例えば、高校まで一生懸命やってきたプレイヤーから「大学では、もうソフトボールはいいです」というような話が聞かれる。全くの私見であるが、本稿で話してきた捉えが指導者になかったためでは？というような気もする。本稿は、実践研究のあり方についての提言であるが、このような考え方に基づく指導を積み重ねていけば、ソフトボールの更なる普及・発展につながるのではないだろうか。

注

（注1）ちなみに、プレイヤーの要望をはっきりさせる場合、現実には2種のケースがあろう。一つはプレイヤー自らが要望を持っている場合である。二つ目は、プレイヤーと指導者が相談して決める場合である。

（注2）「戦術」とはここでいう例で説明すれば、「ゲーム中にそのプレイヤーがどんなバッティングをしているか（配球をどう読み、どのコースを打っているか）」である。

（注3）これに関してよく見られる例として、左打者に変える場合や、左手中心で振るフォームに改善する場合があるが、左打者になり得るまで、あるいは改善できるまでにかかなりの期間を要することになり、限られた期間で「ソフトボールを堪能したい」「長打を打てるようになりたい」を実現するにはかなり無理があるだろう。

【問題提起】 大学ソフトボール男子選手の試合姿勢

紅 林 和 博 (愛知大学)

1. はじめに

今回の問題提起のきっかけとなったのは、第35回全日本大学選手権大会（香川：丸亀）の2回戦にて発生した出来事によるものである。ただし、この出来事はほんの一例であり、以前にも同様な出来事は発生しており、今回に限ったことではないことをご承知いただきたいと考える。もちろんこの試合の中だけでもこの出来事に類するようなことは発生した。（編集部註：該当大学名および該当選手名については、彼らに対する筆者のもつ愛情からあえて実名で報告させたが、ここでは仮名とする。）

2. 発生事例

インカレ第2日目、A大対B大（2回戦）のゲームが11時23分に開始された。4－1とリードしたB大学に対し、3点をとって追いついたA大学5回表の攻撃終了時にその出来事は発生した。2塁ランナーのA大のa選手と打者の放ったショートゴロを処理したB大のb選手が攻守交代ですれ違った際にb選手のグラブがa選手に偶然に接触した。その際の会話は以下の通り。（内容は試合終了後に筆者がb選手から聞き取りしたもの）

a選手：「グラブが当たっただろ。あやまらんか。」かなり強い口調。

b選手：「あっ、すいません。」ややムツとした言い方。

a選手：「なにっ」

当大学の選手がベンチに戻ってくるのを待っていたB大監督の目に選手の最後尾に歩いて近づいてくるa選手の姿が見えた。彼は円陣を組んだ当大学の中に割って入ろうとしてきた。監督はとっさに『なにかおかしい』と感じてb選手に近づいた。それとほぼ同時にa選手はb選手の左足めがけて砂を蹴り上げた。（監督の目には左足に接触したように見えたがb選手本人に確認したところ「接触はしていない」とのこと。）その際の会話が以下の通り。

a選手：「おまえ、いい加減にしとけよ。」（但し、はっきり聞きとれなかった）

B大監督：「こら、学生だろ。やめろ。」やや強い口調でa選手に言った。

a選手：「うるせえ。バカ」監督に対してa選手は言い放った。

以上が発生事例である。

さらに上記状況に2点付け加える必要がある。

1点目が審判の問題。その際に審判からは警告はもちろん指示は全くなかった。もしサッカーであれば即刻退場もある状況であると考えられる。野球同様ソフトボールもやや審判の立場が弱いように思われる。（ここでは審判の権威について論じるつもりはない。）

2点目はB大監督がA大監督と話し合った内容である。試合終了後にB大監督がA大監督に今回の件について聞いたところ以下のような内容であったそうである。

A大監督：「あの件に関しましては私もb選手に聞いた。その際にb選手からは、a選手にスパイクされた。それであのような行動に出た、と聞いている。そういう意味ではお互いさまの部分があるのでは。ただし、わたしもそのような行動をとらないようにと常々注意をしているのですが…」

試合終了後、筆者がb選手から聞いた話からするとa選手は自らの監督に対しても嘘を言っていることになる。相手の監督に対し侮辱的な言葉を発し、自らの監督に対しても偽りを図るとは…。

3. 大学男子ソフトボールの現状

ここでいう現状とは競技姿勢の問題のみとする。

筆者が大学男子ソフトボールに関わってきた約12年（選手：4年・監督：8年）で前述した出来事はまさに日常的に発生している。しかもいわゆる“伝統のある、強い”大学ほどその出来事を発生させているということは重要である。大学選手権においてベスト8以上の成績を残す力のある大学はほとんどすべてといっても過言ではない。（もちろん当大学においても例外ではない。）この出来事が引き起こすマイナス要因は果てしなく大きいものと思われる。選手同士のフェアプレー精神の阻害により実力が発揮されないゲーム。ルールどころか常識を疑うような言動が飛び交う見苦しいゲーム。どれもスポーツでしか味わえないある種の公平感がそこには全く存在しない。スポーツのどこが教育なのか。そしてもうひとつ、観戦していただいている方々に極めてはずかしい。

今、大学男子ソフトボール界、いや男子ソフトボール界は非常に厳しい状況にあると言わねばならない。このままではオリンピック競技としてますます注目度の高まっていく女子ソフトボール界に比べ、マイナースポーツの道を一途に進むしかないのかもしれない。特にこの数年の大学男子ソフトボール部員の減少がそれを顕著に物語っている。

4. 大学男子ソフトボールの発展を願って

大学も生き残りをかけ、特にこの10年間ほどの間に推薦入学制度が広がってきたように思われる。スポーツ推薦制度を利用し、大学男子も高校のソフトボール経験者がかなり増加してきた。大学選手権大会が高校の同窓会のような雰囲気さえ感じられることがある。ソフトボール界にとってもソフトボールを長く続けてもらえることは非常にうれしく、またレベルのあがることも大変喜ばしいことだ。但し、高校時代のソフトボール未経験者が経験者よりひどく野次られるのを見るにつけ、「井の中の蛙」的な雰囲気を感じるのには筆者だけだろうか。自分の高校が一番。自分の大学が一番。自分が一番。こんな考えが今回発生した出来事を引き起こすきっかけになったのかもしれない。指導者や運営側はもっと大学男子ソフトボールが世の中に認められ、もっと広く人材が集まるように何か行動を起こさなければならないのかもしれない。（もっと端的に言えば『高校の延長で大学でソフトボールをやる』というような雰囲気を打破しなければならない。）

世の中の情勢を見るに企業スポーツは極めて厳しい状況にある。日本リーグで優勝を争うチームがいきなり廃部になったことも近年まれではない。これからの男子ソフトボールを率いていく役割を担うのは大学なのかもしれない。そのためには今回発生したつまらない出来事は一刻も早く根絶し、「井の中の蛙」を脱しなければならない。

少子化・高齢化が進む21世紀。スポーツも選択される時代に突入している。競技スポーツとして男子ソフトボールが生き残っていくためには、今対応策について考え、それらを即実行しなくてはならない時期に来ていると考えられる。

【事例報告】 年間練習計画 ～神戸親和女子大学ソフトボール部～

島田佳代子（神戸親和女子大学専攻科）
但尾哲哉（神戸親和女子大学）

ソフトボールの指導に当たり、ソフトボールに適応した身体作りに重点を置き5年間指導をしてきた。指導当初は①技術面 ②体力面 ③精神面 の順に重きを置き練習をしてきたが、上位チームと対戦する度に自チームに欠けているものが技術面以外のものと感じ始めた。そこで、年間計画を綿密に立てることにより体力面を中心に、精神面・技術面のバランスのとれた練習を心掛けた。

計画を立てるにあたり、1年間を前半（春季リーグ、大学選手権等）と後半（秋季リーグ、新人戦）の2周期に区分し計画を立てた。

「完全休息期」 12月20日～1月8日

大学も冬期休みで選手は授業も練習も休みなので完全休息期と位置づけた。

「準備期Ⅰ」 1月9日～2月14日

一般的体力トレーニング

一般的な体力作りを個人に合ったトレーニング方法とトレーニング負荷を得るため、フィットネスクラブで週3回のウェイトトレーニングと大学で週3回の持久性トレーニングを行った。

「鍛錬期Ⅰ」 2月15日～3月20日

専門的体力トレーニングと基本的技術練習

ソフトボールの専門的な動きにあったSQAトレーニングを中心に行い、ウェイトトレーニングも1日おきに行った。技術練習では、投げる、捕る、打つ、走るの基本と、内野・外野の中継プレー、内野間の連携プレーまで行った。

「仕上げ期Ⅰ」 3月21日～4月24日

専門的体力トレーニングと実戦練習

SQAトレーニングとウェイトトレーニングを合わせて、週3回のトレーニングを継続して行った。技術練習では、実業団4チーム、大学9チーム、高校4チームと練習ゲームを行いフォーメーションの見直し、攻撃の得点パターンの確認、修正を行った。

「試合期Ⅰ」 4月25日～5月9日

関西大学ソフトボール春季リーグ
全日本総合予選

- 「休息期」 5月10日～5月15日
1月より週1回の休みのため、ここで1週間の休みを取ることによって心身のリフレッシュを計った。選手たちは授業は通常通りなので休息期と位置づけた
- 「準備期Ⅱ」 5月16日～6月19日
一般的体力トレーニングと基本的技術練習
週3回のウェイトトレーニングと、投げる、捕る、打つの基本的練習但し、この時期高校チームからの練習ゲームの申し入れが多く週末は高校生とのゲーム。(新人を中心に)
- 「鍛錬期Ⅱ」 6月20日～7月16日
専門的体力トレーニングと実戦練習
SQAトレーニングをウォーミングアップに多く取り入れた。
技術練習は、7月10・11日の宇和島オープンをはじめ、ゲーム感を損なわないため、努めて多くのゲームを行った。実業団2チーム、大学4チーム、クラブチーム1チーム。
- 「仕上げ期Ⅱ」 7月17日～7月29日
専門的体力トレーニングと基本的技術練習
最も暑い時であることを考慮し、ウォーミングアップを短めに設定し、SQAを中心にアップを行った。技術もここでもう一度基本の見直しを心掛け行った。
- 「試合期Ⅱ」 7月30日～8月15日
西日本インカレ
全日本インカレ
日米交流戦
- 「完全休息期」 8月16日～8月22日
前回同様授業も練習もないため完全休息期とした。
- 「鍛錬期Ⅲ」 8月23日～9月18日
専門的トレーニングと実戦練習
前半はショートダッシュを多く取り入れた走り込みと週3回のウェイトトレーニングを行った。後半でSAQのトレーニングを中心に行った。また、継続しウェイトトレーニングを週3回行った。

技術練習は試合期まで、さほど時間が無いためすぐに実戦に入った。
練習ゲームは、実業団2チーム、大学2チームと行った。

「仕上げ期Ⅲ」 9月19日～9月25日

専門的トレーニングと実戦練習

鍛錬期での練習ゲーム数が少なかったため、ここでも練習ゲームを少し多めに行い修正を計った。

「試合期Ⅲ」 9月26日～11月3日

関西大学ソフトボール秋季リーグ

関西大学ソフトボール新人戦

「移行期」 11月4日～12月20日

一般的体力トレーニングと基本的技術練習

有酸素運動、ストレッチ、スポーツマッサージを多く取り入れ身体の積極的リフレッシュを図る。また、怪我等の選手はスポーツ整形外科医にかかり治療にあたった。技術練習においては、ひとつ、ひとつの動作を頭でも理解し動けるよう時間をかけた。また、フォームの改善もこの時期に行った。後半は、体力トレーニングと精神面のリフレッシュも兼ねサッカー、バスケット、バドミントン等の他の種目も多く行った。

1月9日～8月15日までの前半では試合期を2回持ち、8月23日～12月20日の後半では移行期を長く持つのが特徴である。前半では、水泳実習、教育実習、就職活動等の大学行事もあり個人のコンディション、チームのコンディション双方を整えるのが難しく、後半の移行期では次年度の計画を立て、それにある程度沿った練習を行う必要がある。また、クラブとして新一回生迎える準備もこの時期に考えておく必要がある。

この様に一年を計画し練習を行ってきたが、特にトレーニングにおいては何より大切なのは根気よく継続することである。トレーニングをいかに選手に興味を持たせ継続してもらいかである。雨の日にウェットトレーニング、補強トレーニングをするのではなく、計画的に年間を通し行う必要がある。今回は、あまり触れなかったが、フィットネス（特に瞬発力）のコントロールテストも定期的に行う必要がある。その結果が選手のトレーニングを行う動機づけにもなり、トレーニングメニュー負荷の見直しの材料となる。

すでに皆さんのチームでは、実行されている内容であると思いますが、神戸親和女子大学の年間練習計画の基本線を紹介いたしました。細かいトレーニング内容につきましては省略させて頂きました。この結果を数量的に紹介できませんが、戦績として本学では初めて西日本大学選手権で3位の成績を残すことができました。さらに、トレーニング効果として年間通して怪我が非常に少なくなったことは、ここで特筆できる点であると思います。

皆さんの今後のソフトボール活動の何らかのお役に立てて頂ければとご紹介申しあげました。（編集部註：神戸親和女子大学は、今年度のインカレでも3位になりました。）

【研究紹介】最近の研究報告から指導に役立つこと（1）

末 井 健 作（姫路工業大学環境人間学部）

20世紀最後のシドニーオリンピックは、グリーンオリンピックあるいはエコオリンピックといわれ、スポーツと環境との関連を強く打ち出した大会であり、また、民族の独立と協調・連帯を、そして、各々の競技におけるパフォーマンスに多くの人々が感動を憶えた記念すべき大会でもありました。各競技の競技力を高めることができた要因は、スポーツ科学の発展によるところが大きいものと考えられます。小林らは、スポーツパフォーマンスの向上を導いた要因として、筋力・筋パワートレーニング法、持久力トレーニング法、技術トレーニング法及びコンディショニング法の開発・改善が大きく寄与していることを示唆しています。さらに、21世紀に向けてスポーツ科学の進歩は著しいものがあると予測されます。今後、コーチは、それらの研究成果を指導にどう活かすかを考えなければならないし、研究者は独自の研究を進めることも重要ですが、現場において指導に役立ちやすい研究も求められていると思います。その為には、コーチと研究者との連携を如何に図るか、といった古くて新しい課題に大学連盟としても取り組んで行きたいと考えています。今後、さらにこの機関誌を通じてコーチの皆さんとの意見交換の場になればと、心密かに期待をしています。

そこで、最近の研究報告からソフトボール競技の指導に役立つと思われるトピックスを紹介してみたいと思います。テーマは、陸上競技における短距離選手の走法の指導に関する研究から、

速く走るには？

伊藤らによれば、従来日本においては、ももを高くあげることが疾走速度を高めると考えられてきたため、日本のどこでも「もも上げ」をやる短距離選手を見かけたほど、一般的に指導の中心はキック動作よりキック終了後の脚をいかに運ぶかにあったといわれています。しかし、世界の一流選手から日本人の大学生までの短距離選手や小学生の疾走動作を分析した結果、短距離選手において疾走速度ともも上げの高さとは有意な相関関係が認められず、しかも小学生のももの高さは短距離選手とほとんど変わらなかったことを図1は示しています。

そして、疾走速度と有意な相関関係が見られたのはキック動作に関するものであります。足関節の動きと走速度の関係から、スタートダッシュから最高疾走速度までの走速度の増加に

図1 最高疾走速度ともも上げ高の関係

【研究紹介】最近の研究報告から指導に役立つこと（1）

末 井 健 作（姫路工業大学環境人間学部）

20世紀最後のシドニーオリンピックは、グリーンオリンピックあるいはエコオリンピックといわれ、スポーツと環境との関連を強く打ち出した大会であり、また、民族の独立と協調・連帯を、そして、各々の競技におけるパフォーマンスに多くの人々が感動を憶えた記念すべき大会でもありました。各競技の競技力を高めることができた要因は、スポーツ科学の発展によるところが大きいものと考えられます。小林³⁾らは、スポーツパフォーマンスの向上を導いた要因として、筋力・筋パワートレーニング法、持久力トレーニング法、技術トレーニング法及びコンディショニング法の開発・改善が大きく寄与していることを示唆しています。さらに、21世紀に向けてスポーツ科学の進歩は著しいものがあると予測されます。今後、コーチは、それらの研究成果を指導にどう活かすかを考えなければならないし、研究者は独自の研究を進めることも重要ですが、現場において指導に役立つ研究も求められていると思います。その為には、コーチと研究者との連携を如何に図るか、といった古くて新しい課題に大学連盟としても取り組んで行きたいと考えています。今後、さらにこの機関誌を通じてコーチの皆さんとの意見交換の場になればと、心密かに期待をしています。

そこで、最近の研究報告からソフトボール競技の指導に役立つと思われるトピックスを紹介してみたいと思います。テーマは、陸上競技における短距離選手の走法の指導に関する研究から、

速く走るには？

伊藤^{1) 2)}らによれば、従来日本においては、ももを高くあげることが疾走速度を高めると考えられてきたため、日本のどこでも「もも上げ」をやる短距離選手を見かけたほど、一般的に指導の中心はキック動作よりキック終了後の脚をいかに運ぶかにあったといわれています。しかし、世界の一流選手から日本人の大学生までの短距離選手や小学生の疾走動作を分析した結果、短距離選手において疾走速度ともも上げの高さとは有意な相関関係が認められず、しかも小学生の

ももの高さは短距離選手とほとんど変わらなかったことを図1は示しています。

そして、疾走速度と有意な相関関係が見られたのはキック動作に関するものであります。足関節の動きと走速度の関係から、スタートダッシュから最高疾走速度までの走速度の増加に

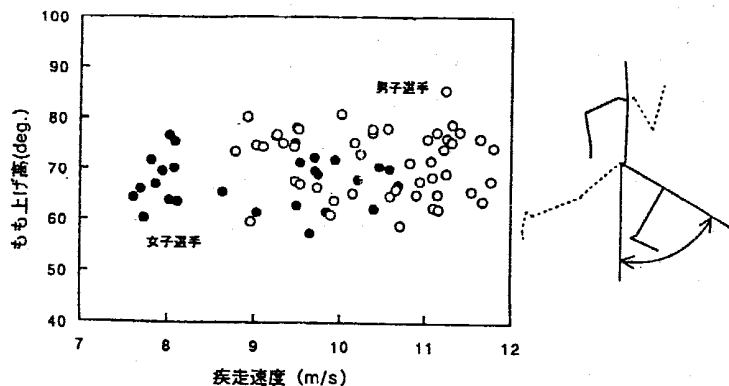


図1 最高疾走速度ともも上げ高の関係

対して、接地期の足関節の最大伸展速度はスタート後3歩目まで増加しましたが、それ以降は増加せずほぼ一定の値を示したということです。また、足関節の最大伸展速度は、疾走速度の高い選手ほど低かったそうです。また、男子、女子選手の接地期後半における下肢動作の特徴をモデル的に示し（図2）、下腿角度に男女の違いは認められるが、両選手の離地時の大腿角度はほぼ同じであったことを明らかにしている。つまり、短距離走において高いパフォーマンスを得るには、足関節が接地衝撃によって屈曲しない（”つぶれない”）ようにトレーニングする必要があるが、自ら積極的に足関節を伸展するようなキック動作、接地期後半のいわゆる「足首をかえす」ようなスナップは、身体重心の上下動を生じさせる原因となり、好ましくないとされました。

図2 接地期後半のキック動作モデル

以上の研究報告から、ソフトボール選手の走法を考える時、走塁においては、短距離選手のスタートダッシュから中間疾走に移るあたりの動作が参考となり、ももを高く上げ、膝関節及び足関節を伸展するような動作ではなく、スタートダッシュ時における低いスタンディング姿勢から勢い良く飛び出して膝に余裕をもたせ、自ら積極的に足関節を伸展させないキック動作が求められるといえます。しかし、一塁ベース以外の塁及び塁間では、そのスピードを活かして種々のスライディングをしなければならないこともあるので、応用練習として疾走中でのストップ動作や効率の良いキック動作からのスライディングをどのように行えばよいのでしょうか。この点から、コーチの皆さんは、どんな練習プログラムをお考えになるのでしょうか。ご示唆いただければ幸いです。

文 献

- 1) 伊藤 章・石川昌紀（2000）：短距離走におけるスナップの意味，バイオメカニクス研究. Vol.4 No. 2, pp159-163
- 2) 伊藤 章（2000）：短距離走のパフォーマンス向上にバイオメカニクス研究は役立つか？. 日本体育学会第51回大会号 合同シンポジウムpp72
- 3) 小林寛道・石村宇佐一（2000）：スポーツ科学の21世紀への提言～シドニーオリンピックに学ぶ～. 日本体育学会第51回大会号 合同シンポジウムpp68

対して、接地期の足関節の最大伸展速度はスタート後3歩目まで増加しましたが、それ以降は増加せずほぼ一定の値を示したということです。また、足関節の最大伸展速度は、疾走速度の高い選手ほど低かったそうです。また、男子、女子選手の接地期後半における下肢動作の特徴をモデル的に示し(図2)、下腿角度に男女の違いは認められるが、両選手の離地時の大腿角度はほぼ同じであったことを明らかにしている。つまり、短距離走において高いパフォーマンスを得るには、足関節が接地衝撃によって屈曲しない(“つぶれない”)ようにトレーニングする必要があるが、自ら積極的に足関節を伸展するようなキック動作、接地期後半のいわゆる「足首をかえす」ようなスナップは、身体重心の上下動を生じさせる原因となり、好ましくないとされました。

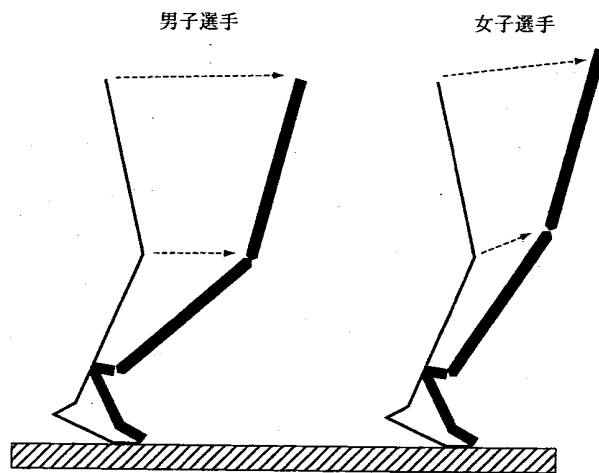


図2 接地期後半のキック動作モデル

以上の研究報告から、ソフトボール選手の走法を考える時、走塁においては、短距離選手のスタートダッシュから中間疾走に移るあたりの動作が参考となり、ももを高く上げ、膝関節及び足関節を伸展するような動作ではなく、スタートダッシュ時における低いスタンディング姿勢から勢い良く飛び出して膝に余裕をもたせ、自ら積極的に足関節を伸展させないキック動作が求められるといえます。しかし、一塁ベース以外の塁及び塁間では、そのスピードを活かして種々のスライディングをしなければならないこともあるので、応用練習として疾走中でのストップ動作や効率の良いキック動作からのスライディングをどのように行えばよいのでしょうか。この点から、コーチの皆さんは、どんな練習プログラムをお考えになるのでしょうか。ご示唆いただければ幸いです。

文 献

- 1) 伊藤 章・石川昌紀 (2000) : 短距離走におけるスナップの意味, バイオメカニクス研究. Vol.4 No. 2, pp159-163
- 2) 伊藤 章 (2000) : 短距離走のパフォーマンス向上にバイオメカニクス研究は役立つか?. 日本体育学会第51回大会号 合同シンポジウムpp72
- 3) 小林寛道・石村宇佐一 (2000) : スポーツ科学の21世紀への提言～シドニーオリンピックに学ぶ～. 日本体育学会第51回大会号 合同シンポジウムpp68

ソフトボール投手の尺骨疲労骨折 —投球時の直達外力との関連について—

清水卓也*¹, 三浦隆行*²

はじめに

著者らは、ソフトボール投手に発生した尺骨骨幹部疲労骨折を経験した(第23回日本整形外科学会に報告済み)。本症例は、ウインドミル投法時に前腕尺側を腸骨部にあてて、前腕の動きに急停止を与えることにより、手関節にスナップを利かせ、球速を増大させていた。この症例の疲労骨折発生部位は、ちょうど尺骨骨幹部近位1/3と中1/3の境界付近で、投球時に強く腸骨部にあたる部位であり、その発生機序に直達外力の関与が考えられる(図-1)。

本研究の目的は、ソフトボール投手における尺骨疲労骨折の発生機序に対してこのように直接外

力が関与しているか否かを明らかにすることである。

対象と方法

全日本大学ソフトボール連盟に登録された231チームのうち所在地の確認ができなかった6大学を除く225チーム(男子138チーム、女子87チーム)の投手、または投手経験者にアンケートを郵送した。

アンケートは尺骨を図示した上で、ソフトボール投手歴、ソフトボール選手歴、投法(投法1:腸骨部に前腕をあてる投法、投法2:腸骨部に前腕をあてない投法)、慢性的な尺側部痛の有無、尺骨疲労骨折と診断された経験の有無、競技復帰

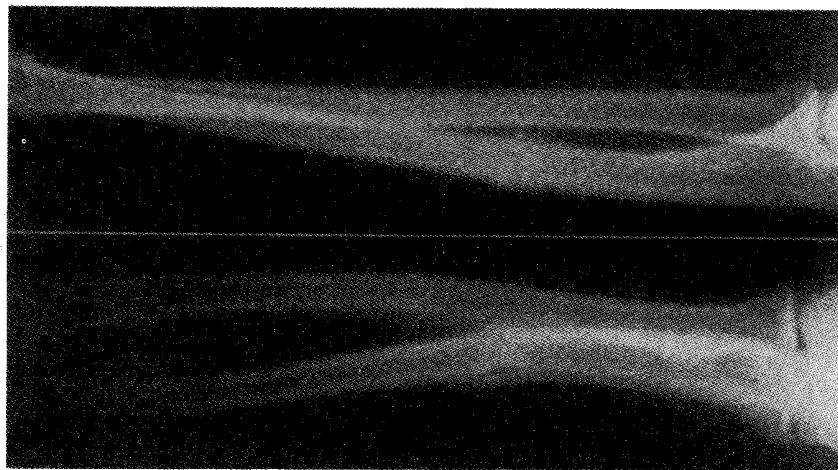


図-1 尺骨疲労骨折
ソフトボール投手, 男性, 22歳.

*¹ 名古屋大学 整形外科

*² 中京大学 保健センター

アンケート：下線部を記入してください。また該当する項目の数字に○をふってください。

ご芳名（イニシャルでも結構です） _____

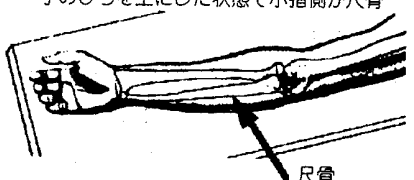
所属チーム _____

ソフトボール投手歴 _____ 年 ソフトボール選手歴 _____ 年

ソフトボールの投法 1. 前腕尺骨側を骨盤に当てる投法
2. そのまま前腕を振り抜く投法

現在までに前腕の尺骨側（小指側）に慢性的な痛みを覚えたことがありますか。（図参照）
1. はい
2. いいえ

手のひらを上にした状態で小指側が尺骨



尺骨

現在まで尺骨の疲労骨折と診断されたことはありますか。
1. はい
2. いいえ

尺骨の疲労骨折と診断された方へ

そのときのポジションはどこですか？ _____

競技復帰にかかった期間はどれくらいですか？ _____ ヶ月

ご協力ありがとうございました。

図-2 アンケート調査表

までに要した期間を尋ねた(図-2)。

統計学的処理は X^2 検定を行い、危険率5%以下を有意とした。

結果

回答は225チーム中52チーム(回答率23.1%)、男子27チーム(回答率19.6%)、女子25チーム(回答率28.7%)より得られた。回答した投手または投手経験者数は106名、男子40名、女子66名であった。

投法別では腸骨部に前腕尺側をあてる投法(以下投法1)が82名、腸骨部にあてない投法(以下投法2)が19名、その他(ウィンドミル以外の投法)が5名であった。男女別では男子で腸骨部にあて

る投法1が90%、投法2が10%、女子では腸骨部にあてる投法1が72%、通常の投法2が23%、その他5%であった(図-3)。

障害発生数を眺めると、尺骨疲労骨折が4例(3.8%)、慢性的な前腕尺骨部痛が29例(24.5%)であった。

投法と障害発生数の関係を眺めると、尺骨疲労骨折4例はいずれも投法1で発生しており、発生率は4.9%であった。慢性的な前腕尺骨部痛の発生は投法1で27例(32.9%)、投法2では2例(10.5%)であった。慢性的な前腕尺骨部痛と疲労骨折の発生をあわせると、投法1で31例(37.8%)、投法2で2例(10.5%)であり、有意に投法1の発生率が高かった(図-4)。

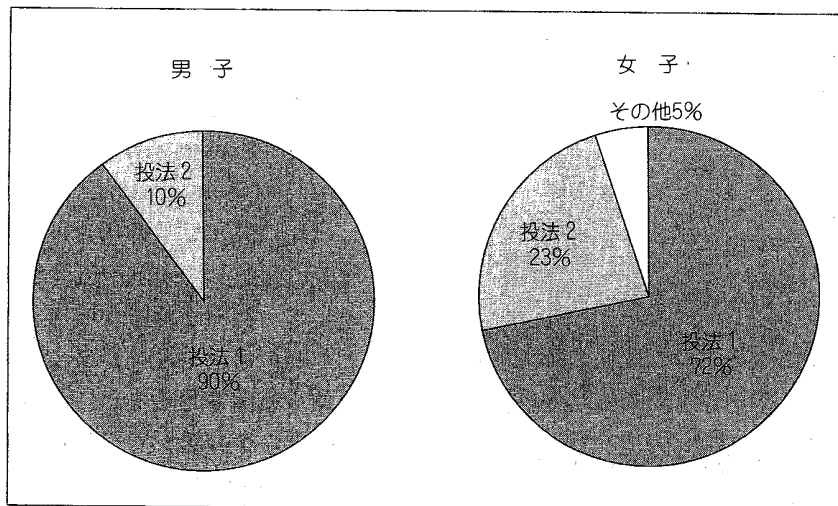


図-3 投法の分類

投法1：腸骨に前腕をあてる投法。
 投法2：腸骨に前腕をあてない投法。

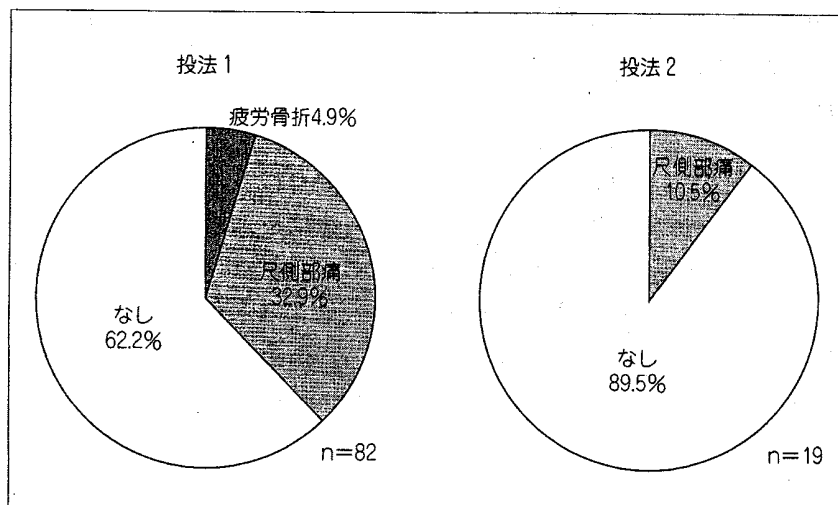


図-4 投法別障害発生率

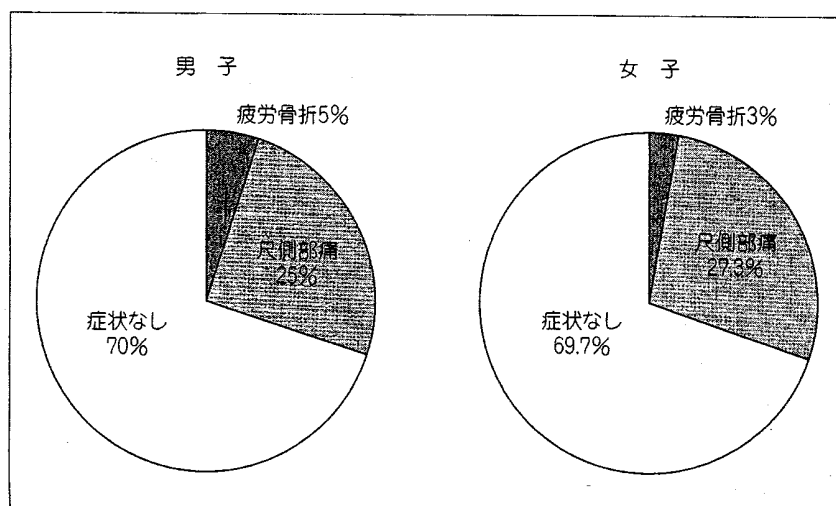


図-5 性別発生障害率

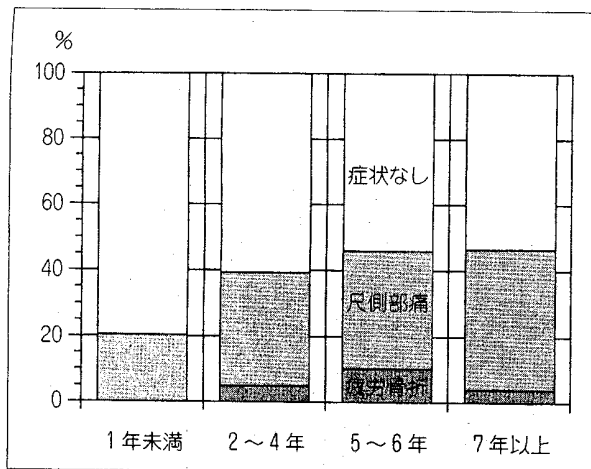


図-6 投法1における経験年数別障害発生率

性別を眺めると、男子が尺骨疲労骨折2例(5%)、慢性的な前腕尺側部痛10例(25%)、女子が尺骨疲労骨折2例(3%)、慢性的な前腕尺側部痛18例(27.3%)であり、とくに両者間に有意差を認めなかった(図-5)。

経験年数と慢性的な前腕尺側部痛または疲労骨折の発生率を眺めると、前腕尺側部痛は1年以下で20%、2~4年で34.8%、5~6年で35.0%、7年以上で41.7%であり、経験年数が増加するにつれ発生率も上昇した。とくに経験年数2年を境に前腕尺側部痛の発生率は増加しており、一方、尺骨疲労骨折は経験年数2年未満では発生していなかった(図-6)。

尺骨疲労骨折と診断された4例について眺めると、競技復帰までの期間は1ヵ月：1例、2ヵ月：1例、3ヵ月：1例、6ヵ月：1例で平均3ヵ月であった。

考 察

尺骨骨幹部疲労骨折は、1941年に Troell¹⁾が最初に報告した。これまで尺骨疲労骨折の発生機序について報告されたものは、介達力に起因するとしたものの方が多い。1955年 Evans²⁾は、リフティング動作による筋収縮が尺骨骨幹部に対して垂直のストレスを与え、解剖学的形態と相まって疲労骨折を引き起こすとした。1982年、Mutoh³⁾が2例のスポーツに伴う尺骨疲労骨折(骨幹部)を初めて報告し、そのうち1例がソフトボ-

ール投手である。その発生機序は投球に伴う挙上動作主体と考えられてきた。1991年 Tanabe⁴⁾はソフトボール投球時の画像解析と、尺骨のCTによる解剖学的な形態分析から、捻転力が尺骨骨幹部中央に加わり、疲労骨折を引き起こすと報告した。

これに対して1998年藤田⁵⁾は、ソフトボール投法に発生した4例の尺骨骨幹部疲労骨折の成因として、急激な練習量増加と、ウィンドミル投法で前腕中央部を投球の際に腸骨部にあてて手関節を強く屈曲させることにあると推論している。

著者らが経験した尺骨疲労骨折発生部位は、腸骨部に前腕尺側があたる部位と一致していた。これは、藤田らが推論したごとく、ウィンドミル投法で前腕中央部を投球の際に腸骨部にあて、その結果として手関節を強く屈曲させることが発生機序に関与していることを示している。またこの疲労骨折は、慢性的な前腕尺側部痛に引き続いて生じていた。このように、慢性的な前腕尺側部痛は、尺骨疲労骨折の前段階または尺骨疲労骨折自体を含んでいると考えられる。

今回のアンケートでは前腕尺側を腸骨部にあてて球速を増大させる投法において慢性的な前腕尺側部痛や尺骨疲労骨折は増加することが示された。したがって、藤田らが述べている『尺骨への直達外力も疲労骨折を引き起こす一つの要因である』とする考えを支持するものである。

また、今回のアンケート結果から、ソフトボール投手経験2年以上の者に尺骨疲労骨折発生の危険性が大きいと考えられる。

結 語

1) ソフトボール投手において、前腕尺側を腸骨部にあてる投法では、慢性的な前腕尺側部痛および尺骨疲労骨折が多発した。

2) 尺骨骨幹部疲労骨折の発生機序として、直達外力の関与も考慮すべきである。

謝 辞

アンケート調査にご協力いただいた大内敬哉中京大学教授および各大学ソフトボール部関係者に感謝致します。

編集部註：筆者らのご厚意により、臨床スポーツ医学：Vol.16, No.11 (1999-11) から転載させていただきましたが、文献の部分は誌面の都合で割愛させていただきました。悪しからずご了承ください。

【報告】 平成12年度の事業報告と今後の課題

理事長 末井健作

平成12年度本連盟の事業は、8月の文部大臣杯第35回全日本大学ソフトボール選手権大会（香川県丸亀市）および第6回全日本女子短期大学ソフトボール大会（東京都日野市・明星大学）、11月の第27回東西対抗（兵庫県西宮市）と関係各位のご協力をいただき成功裡に終へることができました。大会運営に携わっていただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。後援いたしました東日本・西日本の両大学選手権大会は、共に雨天のため残念ながら中止を余儀無くされました。出場大学の選手諸君は、来年度の大会に向けて根気よく練習に励んでください。本年度卒業予定の選手諸君は、残念でしたでしょうが、卒業後もソフトボールを各々の目的に向かって楽しんでください。期待をしています。

全日本女子短期大学大会は、東京都世田谷区の日本体育大学から東京都日野市の明星大学へ、また、東西対抗も滋賀県長浜ドームから兵庫県西宮市へ会場を移しましたが、各々東京都学連、関西学連の学生委員を中心に大会運営がなされ、着実にその成果を上げ、各方面から高い評価を得ました。東西対抗は、その在り方をここ2年間に亘り皆様と共に検討して来ましたが、設立当初の目的を果たしたのではないかと、との判断から発展的解消が平成12年7月の常任理事会で決定され、平成13年3月に開催予定の理事会および総合役員会にそれを提案することになりました。加盟大学の判断を仰ぎたいと思います。新たなる飛躍を期して新設大会を検討しております。短大大会は、参加大学の減少が心配されていますが、さらなる発展を期待したいと思います。

ところで、最近、男子の試合において大学生としての品位に欠ける態度が見受けられるようです。勝負にこだわる余りか、ファイトが空回りして粗暴なプレイや行為につながっているようです。選手の皆さんは、見ておられる多くの人たちに感動を与える品位ある、そして、気迫溢れる素晴らしいプレイを示してください。

そして、大学連盟としては、チームおよび選手登録者数を如何にして増やしていくかを真剣に検討しています。そのためには、各地区において可能な限り参加しやすいリーグ戦とか、都道府県単位の選手権大会等を開催していただきたいと思います。大学連盟には加盟していないが、地域の大会には出場している大学生のチームもあるようです。積極的に誘ってください。また、広報活動を強化するため、インターネット上に大学連盟のホームページを開設しました。今後はこれに掲示板等を加え、加盟大学の学生同士やソフトボール愛好者との交流を図ることによって、広報活動をいっそう進めていきたいと思っています。さらに、学生役員の活動に積極的に取り組まなければならないと考えています。大学連盟の主体はあくまでも学生諸君・諸姉です。君たちの主体的な活動を期待しています。

来年度の事業と考えています第2回男子ニュージーランド遠征は、予定通り準備が進められます。第1回の遠征以上にその成果が大いに期待されています。ソフトボールを通じて国際交流を深め、日本から文化の発信をしていきたいと思っています。

平成13年度の事業がさらに充実した内容で実施できますよう、皆様の絶大なるご支援・ご協力をお願い申し上げます。

【報告】 女子選抜チームオーストラリア遠征

全日本大学女子選抜チームは、2000年2月11日から21日までの11日間、末井団長（姫路工業大学）・吉野監督（東京女子体育大学）・久保田コーチ（大阪国際女子大学）・細田コーチ（東京女子体育大学）・但尾トレーナー（神戸親和女子大学）選手、24名で編成し、オーストラリア（ブリスベン）に遠征を行った。この遠征は地元オーストラリアチームとの交流、親睦を深め、ソフトボールの技術向上を目的として実施された。選手はオーストラリア文化を知るため、前半はホームステイで貴重な経験した。ソフトボールゲームにおいては、7試合を行い5勝2敗の結果を残した。

- 第1戦 対Redlands Vipers 5－6（負）
- 第2戦 対QAS Heatwave 0－10（負）
- 第3戦 対Redlands Vipers 3－2（勝）
- 第4戦 対Taipei Collge 5－1（勝）
- 第5戦 対Queenslannd All Stars 12－1（勝）
- 第6戦 対Queenslannd All Stars 9－0（勝）
- 第7戦 対Taipei Collge 4－0（勝）

今回の貴重な体験を、1. いっしょに 2. 自分らしく 3. 試合して 4. 楽しい 5. その他の5つのテーマでレポートしてもらい、それをここに報告致します。

東京女子体育大学 4回生 霜田 亜希子 ポジション・ファースト

1. いっしょに このオーストラリア遠征は計8チームが参加しました。私は、できるだけ皆と話ができるように心掛けました。他のチームの人達といろいろな話しをして、新鮮な気持ちになることができました。また、夜遅くまで、ソフトのことを語り合いました。語り合いながら気付かないことが分かり良かったと思います。

2. 自分らしく この遠征では、ホームステイ、観光、試合などいろいろなことを経験することができました。他のチームの人達と交流をもちながら、自分らしく楽しく取り組むことができたと思います。又、反省することもあります。視野が広がり、物事に対する考え方も大きく変わりました。

3. 試合して 海外で試合をするのは、この遠征で4回目ですが、1番強く感じたことは、外国人のパワーと集中力そして、積極性です。例えば、甘いボールは1球目からどんどん振っていくこと。又、守備ではエラーを恐れず前に出ることなど勉強になりました。又、自分自身調子が悪く活躍できませんでしたが、吸収することが、たくさんあったので良かったと思います。

4. 楽しい ホームステイは生まれて初めての経験でした。始めは、英語でしっかり言葉が通じるかなとか、食べ物は口に合うかかなとか不安がたくさんありました。しかし、家族の人達に親切にして頂き、本当に楽しいホームステイになりました。また、英語を耳で聞き理解をして、実際話すことで、良い経験ができたと思います。

5. その他 オーストラリア遠征を通じて、団長の末井先生、監督の吉井先生、そしてコーチの方々にはお世話になりました。私は今4回生で、これから大学を卒業して実業団でソフトボールを続けることになっていますが、この遠征で学んだことを生かして、これから頑張っていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

東京女子体育大学 4回生 武井 裕美 ポジション・ショート

1. いっしょに はじめの5日間は、オーストラリア人の方の家にホームステイをさせて頂きました。そして、オーストラリアの生活を一緒に過ごしました。すごく不安がありましたが、みなさん親切にして頂いて、リラックスして毎日を過ごすことができました。また、各大学から何名かずつ参加しましたが、一緒に生活をしたり、プレイをして深い友情関係が生まれたと思います。

2. 自分らしく 今回の遠征では、4年生が3人ということで、すごくGameでのプレッシャーがありましたが、自チームと同じくらいの雰囲気の良いさに自分らしいプレイをすることが出来ました。

3. 試合して 初日は、混合チームということで、味方の戦力も分からずにGameをしました。さすがに個々の技術は高かったので、個人プレイでは良かった面がありました。バッテリーのリズム、それから内外野の連携がまだあまり良くありませんでしたが、日に日にチームワークが出来てきて、最後には単独で来ているかと思うくらいのチーが出来上がりました。10日間で別れるのは非常にもったいなかったです。

4. 楽しい 今回のオーストラリア遠征では、沢山初めての経験をすることができました。ホームステイ、そして混合チームでのGame。全てが楽しかったです。こんな楽しい遠征は初めてだったので最高の思い出ができました。

5. その他 今回の遠征に参加出来たことを非常に嬉しく思っています。ありがとうございました。もう一度、このメンバーオーストラリアに行ってGameをしたいです。最高でした。ありがとうございました。

東京女子体育大学 4回生 仁木 景子 ポジション・センター

1. いっしょに 今回の遠征では、他のチーと一緒にゲーム、又、私生活を共にしたわけですが、協調性を持って行動する事の大切さを改めて実感しました。初対面の人達との遠征でしたが、多くの仲間とふれあう事ができ、人間性でも成長できたのではないかと思います。又、ホーステイという事もあり、日本とは違う習慣等、経験する事ができ良かったです。

2. 自分らしく ゲームの中で自分らしいプレーをする事がチームを勝利へ導く事であるにもかかわらず、攻撃では全く自分を出す事が出来ませんでした。パワーで押してくる相手チームに対して、足を使った攻撃で守備を崩していく事が出来れば、もっと楽なゲーム展開ができたと思います。これからは、常に自分らしさを忘れず、自分が出来る精一杯の事をしていきたいと思っています。

3. 試合して 外国の選手のパワーや思いきりのあるプレーは本当に素晴らしく見習うべき点が数多くあり、勉強になりました。又、日本のチームも混合チームだった為、最初は不安な点が多々ありましたが、ゲームを重ねていくうちに自然と声の繋がりも出て来

て、単独チームでは味わえない感動がありました。このチームでのゲーム一つ一つが、自分自身にとって貴重なものであり、かけがえのない体験になりました。

4. 楽しい 遠征の前半はホームステイという事で、話を伝えられるか等、不安でいっぱいでしたが、ホームステイの家族の人達は、とても暖かく交流も深められとても楽しい遠征でした。ゲームを通して、とても素晴らしいチームであったと思います。10日間は短いもので、もっと長時間の遠征であればと何度も思いました。今回の遠征で自分自身得たものは数えきれません。今度、それをいかせていければと思います。

5. その他 この遠征に参加するにあたって、多くの方々のお力添えがあったこと、心より感謝しております。又、素晴らしい団長、監督、コーチの方々、そして仲間に恵まれ、このチームで遠征に参加出来たこと、幸せに思っています。本当にありがとうございました。

東京女子体育大学 3回生 武井 紗織 ポジション・キャッチャー

1. いっしょに 違うチームの人と一緒に海外に遠征して、何かいろいろな事があったし、新しいものが見つけられたような気がしました。

2. 自分らしく 自分らしく遠征できたと思う。試合はいまいちだったけど、ホームステイとか自分らしく接せし、その辺はよかったと思います。

3. 試合して 試合では自分の思うようにはいかなかった。でも、自分に足りないものが分かったのでよかったと思います。

4. 楽しい すべてにおいて楽しかった。ホームステイもおもしろかったし、自由行動も楽しかった。ただ単に楽しかったのではなくて、いつもとは違った楽しさで心地よかった。

東京女子体育大学 3回生 見月 志保 ポジション・レフト

1. いっしょに 一緒にこのメンバーでオーストラリア遠征ができてよかったです。初めは、いろいろな大学から集まってきた人達と練習もなしで試合は大丈夫なのかなとか仲良くなれるかななどと、いろいろな不安もありましたが、“このメンバーだったからこそ一緒にやり遂げることができた”と実感しました。

2. 自分らしく 自分らしくというか、打撃においては“自分の持ち味”を出す事ができたと思います。

3. 試合して 試合をして、1試合、1試合チームとして成長していく自分達が目に見えてわかり、嬉しかったです。普段は当たり前のようにやってきた、シフトやポジショニングなど1から一つ一つ確認し合うところから始まり、ぶっつけ本番だったにもかかわらず、良い内容の試合が多くいろいろな事を再確認したり、他の人のプレーを見て学ぶべき事が多くあり、とても勉強になりました。

4. 楽しい 楽しいオーストラリア遠征でした。今まで海外遠征に行ったことはありませんでしたが、最終目標は“勝ち”に行くことでした1試合でも多く勝って上位を目指すことが目標でした。しかし、今回は試合だけでなく、ホームステイをしたり、観光に行ったりと、ソフトボールでの楽しさだけではなく、その他での楽しさも味わうことができました。

5. その他 現役中のチームを離れて、他のチームの人達と一緒にプレーをする事が

できてとても勉強になりました。今回のオーストラリア遠征で学んだ様々なことは、チームに戻って生かしていきたいと思っています。

東京女子体育大学 3回生 大沼 由紀子 ポジション・センター

1. いっしょに ホストファミリーと一緒に過ごした事が、何よりも最高の思い出となりました。言葉が通じなくて苦勞をしましたが、今では、それがあったからこそ心から通じ合う事ができたのだと思っています。

2. 自分らしく 各大学の選手が集まっている中で、どうやって自分をアピールすればいいか、ということが常に頭の中になりました。人には個性があり、声のかけ方もそれぞれでいいと思います。試合や練習でも、自分らしい声を出すように心掛けていました。

3. 試合して 日本とオーストラリアのチームとを比較してみると、体格、パワー、スピードが違いました。そういう相手と試合をする時は、どういった手段（戦法）で攻撃をしていくか、改めて考えさせられ、大変勉強になりました。

4. 楽しい お互いの事もよく知らないままで本当に試合が出来るのか、正直とても不安でした。しかし、そのような心配は全くいらず、一試合目から良い雰囲気の中で試合が出来ました。自分のチームとは違うソフトボールの楽しさを味わう事ができました。

5. その他 この遠征では、数多くの方々にお世話になりました。その恩を忘れる事なく、オーストラリアで学んだ事を生かし、個人、又は、チームのレベルアップを図りたいと思います。

東京女子体育大学 1回生 立道 綾 ポジション・ピッチャー

1. いっしょに 全国の各大学のチームの方達と同じチームとして、この遠征に参加出来た事で、沢山の事を学ぶ事が出来ました。又、オーストラリアのホストファミリーと一緒に生活した事で、言葉は数多く話せませんが、その分、顔や体、全てを使って表現する事を知りました。

2. 自分らしく 緩急をつけたピッチングが自分の持ち味だと思っているので、とても投げやすかったです。キャッチャーのリードに感謝でいっぱいです。

3. 試合して 3試合出させて頂き、3勝することができ、今までの不安が自信に変わったと思います。打たれてしまう時は、同じテンポで投げている時で、リズムを変えたり、間を取ることで相手を狂わせ、低めに投げていけば打ち取れる事を強く感じました。

4. 楽しい 試合中は、ベンチもメンバーも一体となり声を出し、チームを盛り上げる事が出来たと思います。又、観光や食事の際はしっかり切り替え、楽しく会話ができ良かったです。

東京女子体育大学 1回生 谷合 美智子 ポジション・キャッチャー

1. いっしょに オーストラリアのメンバーとソフトボールが出来ました事。私はとても誇りに思います。他のチームの方とソフトボールをして、生活を共にして、楽しさ、嬉しさ、喜び、悲しみを共に出来たすばらしい仲間だったと思います。

2. 自分らしく ソフトボールをする。という目標で、このオーストラリア遠征に参加させて頂きました。私の事を何も知らないゼロからのスタートで、自分らしくソフトボ

ールをする事が私の目標でした。そして、それを実行する事が出来ました。実行できたのも、素晴らしい仲間と出会う事が出来たからです。

3. 試合して 外国人のパワー、ダイナミック差に驚きました。キャッチャーとして、外国のソフトボールと日本のソフトボールの差を一番に感じた事は、審判の方のストライクゾーンの判定でした。チームでは、練習なく、いきなりの試合で心配でしたが、最後の方では本当に良いチームになった事と思います。

4. 楽しい 仲間。そしてお世話になったホームステイの家族に感動しました。言葉が通じなく、初めはどうなる事か不安でしたが、お互いが一生懸命に互いを理解しようとし、ささいな事でもわかち合えた時の喜びは感動的でした。

5. その他 このオーストラリア遠征に参加する事が出来て本当に良かったです。ソフトボールの楽しさを知り、仲間の優しさを知り、自分自身を知る事も、仲間の事を知る事も、外国の方を知る事も出来ました。私にとってこの遠征はソフトボールはもちろんの事、それ以外でも、たくさんの事を学ぶ事ができ、本当に良いスタートをきる事が出来ました。

学習院大学 1回生 須佐 真以子 ポジション・サード

1. いっしょに ホームステイ先で、チームメイトやホストファミリーと、一緒に食事をしたり、外出したりしてとても楽しかった。外国の人に囲まれてこんなに長い時間過ごしたのは初めてだったので、初めはちょっと緊張していたけれど、だんだん慣れてきて、もっと居たいなと思った。4人で日本料理を作って食べてもらった時、おいしいと言ってもらえて本当に嬉しかった。力を合わせて作っただけ良かった。

2. 自分らしく 私はまだまだ未熟なので、私なりにできるだけ多くの事を学んで持ち帰ろうと思っていて、実際にとても勉強になったので良かった。ぜひ、この経験を生かしていきたいと思う。

3. 試合して 今回初めて作られたチームであるにも関わらず、それを感じさせないくらいの一体感があり、日を重ねるごとに大きくなっているように思う。自チームにはない雰囲気もとても楽しめたし、何より他の選手のプレーを見て様々なことを考え、得ることができた。

4. 楽しい 最初は初めて顔を合わせる人ばかりだったので、緊張していたけれど、話をするうちに打ち解けて本当に楽しかった不安もたくさんあったけれど、みんなと一緒にいたからあまり感じなくなったりもした。観光の時も、試合の時も、ホームステイやホテルでの宿泊中も楽しい事がたくさんあって、参加できて良かったと思う。

5. その他 とても貴重な経験をさせていただき、本当に嬉しく思っています。色々な意味で“新しい世界”を目の当たりにすることができて、考え方が変わった点もたくさんありました。これからも、今回学んだ事を忘れずに頑張りたいと思います。

学習院大学 1回生 中崎 綾子 ポジション・ショート

1. いっしょに たったの10日間でしたが、他の大学の人達と共にオーストラリアという初めての土地で過ごすことができて、本当に良かったと思います。コアラパークでコアラを抱いたり、ムービーワールドでショーと一緒にみたりと観光地をバスでみんなでま

わったりすることで同じ体験をし、同じ感動を分かち合うことができたのは貴重な体験でした。でも、やっぱりソフトボールで結成されたチームだけあって、練習や試合の時、一番まとまりを感じる事ができ、チームの一員であることを実感することができました。

2. 自分らしく 大学でも運動を専門的に勉強している学生がほとんどの中、一般の大学から参加した私は、10日間ハイレベルなチームの中でやっていけるか出発前までとても心配でした。予想通りソフトボールに関しては、みんなと大きな差を感じましたが、自分を見失うことなく、みんなから部活の話を聞いたり試合を観ることによっていろいろと学んだりすることが出来ました。この遠征を自分にとってプラスのものにできて、とても良かったと思います。

3. 試合して トップクラスのプレーヤーの技術を近くで観ることができ、また監督の先生の指示やアドバイスからいろいろと学ぶことができよかったです。選手同士コミュニケーションを密にとり合ったり、グラウンドに出ている選手、ベンチにいる選手共に各人が役割をしっかり自覚し、果たしていくことで、寄せ集めのはずのチームが、一つのチームとしてまとまりをもっていたのはすごいと思いました。そして、プレースタイル等も全く異なる異国のチームとプレーができた事もとても良い経験になったと思います。

4. 楽しい 今回初めて出会った人達と10日間かけてソフトボール、共同生活、観光を通して仲良くなれたことは本当に良かったと思います。また、オーストラリアの家族でのホームステイを体験し、異文化に触れることが出来たことは、とても楽しかったです。食事、習慣、言葉、何もかもが日本と異なり、緊張と不安もありましたが、とても新鮮に感じられ良かったです。しかし、この遠征を通して一番楽しかったのが、チーム全員が一つになれていると感じられた練習や試合でした。やっぱりソフトボールは最高のスポーツです。楽しすぎます。

川崎医療福祉大学 2回生 大島 千穂 ポジション・キャッチャー

1. いっしょに 知っている人が誰もいない集団の中に入り、その集団の中で10日間も過ごすということは、私にとって非常に勇気のいることでした。この遠征に参加したいという気持ちは確かに強かったのですが、2月11日が近づくにつれ、不安が大きくなるのも事実でした。しかし、一緒に観光やホームステイをし、そして何よりもソフトボールをすることで、私の緊張は少しずつ消えていきました。他人同士であっても、一つのチームとして練習や試合を一緒にすることで何倍もはやく仲良くなれるのだと改めて実感し、実はすごいことだと思いました。

2. 自分らしく 初対面の人に対して、いつもの友達と接しているような「自分らしさ」を出すのは、私には難しいことで、最初は戸惑ってばかりでした。レベルの高いプレーや考え方をもった人ばかりで、その雰囲気遅れまいと必死になっていました。それがソフトボールのプレーにも影響し、自分らしいプレーを思い切ってすることが出来ませんでした。しかし、自分らしいプレーとは、自分の出来る限りのことを精一杯することだと考え直すで、ある程度開き直ることができ、レベルの高いソフトボールの中でも、自分のプレーが少しずつ出来るようになっていきました。

3. 試合して 個人的な結果としては、決して満足のいくものではありません。しか

し、これが今の私の実力であり、まだまだ勉強や練習の必要があることを再認識させてくれる良いきっかけになりました。ベンチにいて試合を観ているだけでも勉強になることはたくさんあり、あの場にいたことを本当に幸運に思います。特にオーストラリアのプレイスタイルを肌で感じる事ができたのは、日本のソフトボールしか知らなかった私には良い刺激でした。

4. 楽しい ソフトボールの試合も、もちろん楽しかったのですが、他にもたくさんあり、特に私はホームステイがあれほど楽しいものだとは思っていませんでした。私達の分かりにくい英語を一生懸命理解しようとしてくれたり、私達に分かるまで何度も説明を繰り返してくれたホストファミリーの態度は本当に嬉しかったです。夕食後の会話は弾みませんでしたが、いつも笑いが絶えませんでした。国際化が進んでいると言われ、異文化のことも分かっているつもりでいましたが、実際は知らないことが多く驚きもたくさんありました。異文化を直接肌で感じるには、ホームステイが一番だと実感しました。

5. その他 この遠征を通して、私はソフトボールに対する気持ちがまだまだだと感じました。レベルの高いプレーの数々は良い刺激になりました。オーストラリアのプレーはパワーがあるからこそできるものもありますが、日本人の私達にも何か取り入れられるものがあるのではないかと思います。それを考え、活かしてこそ、この遠征に参加した意義があると思っています。良い思い出として終わらせるのではなく、この経験がこれからのためになるようにしていきたいです。貴重な経験が出来たことを本当に嬉しく思います。

中京大学 2回生 安田 真富果 ポジション・レフト・センター

1. いっしょに 出発前までお互い違う大学で、違う環境で生活してきた者同士がホームステイを通じて、お互いの意見を聞いたりして、お互いのことを認め、信頼し合うことのすばらしさを知った。

2. 自分らしく 日本チームの中で、ただひたすら一生懸命やった。大きな声を出したり、ボールに飛び込んだり、一塁にヘッドスライディングしたり、気持ちを前に出した。「それが自分なんだ。自分らしいんだ」と気付いた。必死なときは気付かなかったけど、そうしているときの自分が一番好きだと思った。

3. 試合して 違うチームの者同士が「日本」という一つのチームとなって戦い、みんなで一つのことを成し遂げようとする事の素晴らしさを知った。すごく感動した。試合となると、どうしても「勝つこと」に目がいってしまうが、それだけではないということを知った。全ての試合が終わったときの満足感という言葉で言い表せない。

4. 楽しい 楽しいということは、やはり努力の上にあるものだと知った。自分自身、今までの努力がなければ、この遠征、試合で楽しいと感じなかつたと思う。また、それぞれ異なったチームの者同士が一つのチームとなって、プレーし、応援し、喜びを分かち合ったことは、とても楽しいと感じた。

5. その他 末井団長をはじめ、吉野先生、久保田先生、細田先生、但尾先生に深く感謝したいと思います。先生方のおかげで、実のある充実した遠征になったと思います。そして、日本チームとして一緒にプレーした先輩方や後輩に「ありがとうございました」と言いたいです。

中京大学 2回生 六鹿 美樹 ポジション・ライト

1. いっしょに 他大学のメンバーと一つのチームを組み練習、試合をしてみて、ソフトボールの楽しさと難しさを改めて思い知らされたオーストラリア遠征でした。自分にとってこの遠征で学ぶことが多く、日本に戻った今、ソフトボールに対する見方が変わりました。他大学の練習メニューやトレーニングなど聞いたりし、収穫が多かったです。

2. 自分らしく ソフトボールをしようと思って臨んだ遠征でしたが、上手く調整できなかったのが実際です。試合に出られなくても、ベンチから観ていて勉強になることばかりでした。

3. 試合して 外国の選手の体格、パワーの違いを感じました。高校の時にアメリカへ親善試合に行った時も同じ事を感じたと思いますが、やはり高校生と大学生とでは明らかに違う事を実感しました。外野で守っていても、フェンス手前まで下がっていて打球を止めるのに精一杯でした。

4. 楽しい 思い出ばかりの10日間。ホームステイをするのは始めてで、伝えたい事も上手く伝えられず、苦労した時もありました。でも、いっしょに過ごす時間が増すにつれて、言葉の壁もなんとか乗り越えられ、距離が縮まっていくのを感じました。

5. その他 この遠征で一番嬉しかった事は、友達が増えたことです。これからの大会などで会えるのが楽しみです。

明星大学 3回生 星 めぐみ ポジション・レフト・ライト

1. いっしょに 生活を共に過ごしたり、同じチームメイトとして助け合ったりして、今までの自分には見られないような”自分発見”ができたような気がします。自分が相手に対して、ちょっとした気遣いをすることで、お互いに気分良く過ごすというような久々の集団生活は、とても新鮮でした。気の知れた仲間達と生活すると、どうしても浮かれてしまっ、緊張感がとぎれてしまうような気がするが、程良い緊張感が保てて、メリハリのある規則正しい生活が送れたことに”感謝”の気持ちでいっぱいです。

2. 自分らしく 技術面においては他の選手の皆さんのレベルのすごさに圧倒される場面が多かったと思います。しかし、そこで、プレッシャーを感じることなく”自分らしい”プレーをすることに心がけていました。監督、コーチの先生のおかげで、試合にも出させていただき、自分の実力以上の力を発揮できたと満足しております。そして、すばらしい技術を自分の目に焼きつけることができ、とても充実していました。チームの中で、自分の存在感を（どんなことでも）アピールできたと思っています。

3. 試合して 日本以外の選手・チームを生で見るのは初めてでした。試合中の雰囲気といい、試合後の充実感といい最高ですね。試合を重ねるごとに、私達の顔つきもそれなりの変ってきたという実感がありましたし、試合で得るものがたくさんありました。特に、守備の面で（外野）オーストラリアのチームが、思いきりのあるプレーをしていて感動しました。たった一球のボールに対しても、丁寧でかつ思いきったプレーをすること…これは私の後輩に指導していく課題だなと思いました。

4. 楽しい 楽しかった10日間でした。ホームステイ、ツアー、試合、ホテルでの宿泊…どれをとっても「楽しい」の一言でした。みんなと行動するということが、バスでの移

動中のおしゃべりなど、きっとこの遠征に参加した者しか分からない体験ができました。私は、この遠征に参加しようと思った意味がそこにあります。この遠征で、友達をつくり、ソフトボールを通していろいろな情報を交換し合ったり、ソフトボールについて熱く語り合ったりする…なんと

すばらしいことでしょう！！

5. その他 大学で一人、この遠征に参加しいろいろなこと（ソフトボールの技術・精神面や、ホームステイを通して得た国際交流など…）を学びましたが、一つ一つを消化しきれていないので、まずはその一つ一つを自分のものにできるよう振り返り、日常の実生活に生かしていきたいと考えています。特に、アップメニューやクールダウンメニューを思い返して、整理したいと思います。そして、自分のチームのレベルアップにつながるよう、貢献していきたいです。本当にありがとうございました。

園田学園女子大学 3回生 西岡 留美 ポジション・ピッチャー

1. いっしょに 今回のオーストラリア遠征は単独チームじゃなく、東西の各チームから集まったチームだったので、最初はどうなるかと思っていました。自分自身も不安や緊張をもっていました。でも、それもすぐなくなりました。すごく良い雰囲気でも本当に自分のチームのようでした。たった10日間という短い時間だったのに、こんなにチームが一つになれるかと思いました。顔も合わしたこともない、会話もしたことない人達と一緒に寝て、食べて、行動してとやっついていくにつれて自分がすごく変わった気がしました。いろいろ学べたこともあるし、毎日が発見でした。

2. 自分らしく 日本と違う環境で生活するのは、初めてなので最初はすごく困りました。まずは食が合わないし、季節も違う。いつも一緒にいるメンバーも違って、気を使い最初の2日間ほどは精神的に疲れがひどかったです。しかし、慣れてきて、日本にいるように自分らしい生活、プレーができたと思います。いろいろな面で自分を出せたと思うし、試合でも日本でいるように、同じようにできたと思っています。

3. 試合して やっぱり日本と違って外国人はパワーがあるかと思いました。日本人と体は違うけど、やっぱり体の小さい人もいるのに力があつた。日本は技術ばかりを気にしすぎているような気がしました。日本もソフトボールを楽しんでいるけど、オーストラリアの人達は本当に楽しさを知っているような気がしました。私はピッチャーをしましたが、日本のストライクゾーンがすごくちがうのに苦労しました。すごく狭くて大変でした。でも、オーストラリアの人はそれで試合をしていて、配球とかあまり考えてなさそうで、ただ高低を上手く使って打ちとっている。そういういろんなところで勉強になりました。

4. 楽しい オーストラリアに行ったらすぐにホームステイに入りました。私は英語が全然できないのですがすごく不安でしたがその不安も忘れるぐらい楽しく、良い経験ができました。文化の違いもあるけれど、そういったことは気にならず、本当に家族のように過ごせました。ホームステイで一番楽しいと思えた時間が、いろんな所へ連れて行ってもらえた事もあるけれど、家族で話している事が一番楽しかったです。英語が話せなくても伝わるとい事が分かり、相手もすごく聞いてくれるというのが伝わってきました。私はオーストラリアに行ったら何より楽しかったのがホームステイでした。また、同じ家にホームステイしたいです。

5. その他 私は海外に行ったことがないので、すごいこのオーストラリアに行けて良かったです。違う国の文化も見られたし、違う国のソフトボールスタイルも見られたし、自分にすごくプラスになる事ばかりでした。単独チームでも行きたいけど、やっぱり今回みたいに関係ないチームの人達とまたソフトボールがしたいです。いつも敵同士なのに、この時だけ同じ事を考え、同じものを目指して、いつもできない事を、できない人達とやるということはすごいことです。本当にこの遠征は楽しく、自分にとってすごくためになる内容の濃い遠征でした。忘れられない遠征です。

園田学園女子大学 3回生 高 祐紀子 ポジション…ショート・サード

1. いっしょに 全国の大学が集まって編成されるチームの一員として、みんなと一緒にプレーできたという体験はとても貴重であり、自分にとっても、とてもプラスになった。最初は不安ばかりで消極的だったけど、最後には積極的にみんなと交流ができ、本当に良かった。

2. 自分らしく 10日間という短い期間で”自分らしさ”を出すというのは、とても難しいことだった。ゲームでは「よし！これから！」という時に終わってしまったのですごく残念に思う。

3. 試合して 全試合を通じて感じたことは、オーストラリアチームは、積極的なプレーが多かった。特にバッティングでは、初球からでもどんどん振っていた。選球感もあり、見習うべきところだと思った。日本チームからも学ぶべきことがたくさんあった。今後に生かしていきたい。

4. 楽しい いろいろな観光地を訪れる事ができ、とても楽しく快適な日々を過ごすことができた。現地でお世話して下さった方々には、本当に感謝している。おかげで、綺麗な海や夜景を見ながら食事をしたり、ショッピング街を散策したりと、充実した毎日だった。

5. その他 今回の遠征で貴重な体験をいくつもしたけど、その中でもホームステイは素晴らしいものだった。言葉がなかなか通じず困難ばかりだったけど、ファミリーのあたたかい愛情が感じられ、わずか4日間だったけど、家族の一員になれた気がした。別れはとても辛かったが、すごく楽しい4日間だった。

園田学園女子大学 3回生 大西 真弓 ポジション…セカンド

1. いっしょに 全日本の大学選抜された各地の人達と、見知らぬ地で、共に生活し、ソフトボールをし、みんなと一緒にいろいろな体験をすることができました。一番は、みんなと一緒に相手チームと戦った。レギュラーの9人だけでやったのではなく、全員と一緒に…試合は試合、観光は観光と切り換えて、それぞれの時をいろんな人と一緒に過ごすことができた。

2. 自分らしく オーストラリアに行く前は思っていなかった。オーストラリアでは、何事に対しても自分らしさが出なかった。まずは緊張。言葉が違い、食生活が異なり、試合の相手もいつもと違う。いろんなところから緊張感が私を襲った。自分らしさを出そうとすると、よけいに疲れた。しかし、逆に日本に戻ってから自分自身にとって、良い経験になったと思った。

3. 試合して まず、自分の大学と全日本チームのカラーの違いに戸惑った。また、全日本チームと外国のチームとの違い。そこは、パワーの違いが明らかだった。とはいっても、全日本には全日本の“らしさ”というところがあるだろうし、勝てないことはないと思った。いろんなところで、自分との比較ができて、良い勉強となった。不安になったこともあったけど、これからの私の大学でのプレーに良い経験ができ、また一つ上のレベルを目指すことができる。

4. 楽しい 観光やショッピングはもちろん日本では見ることのできない美しい風景を見ることができ、たくさん買い物ができ楽しいことばかりだった。けれど、試合で苦い経験をしたことや失敗したプレーなど、自分にとってマイナスだったことは、これからも私にとっても、それをバネに励みとなり、良い結果が出やすくなったと思う。そう考えると、これからの大学でのプレーは、楽しみとなり、楽しい日々、充実した日々となるだろう。

5. その他 オーストラリアでの10日間、ホームステイでの出来事、ハプニング、ホテルでの生活、試合、観光、買い物、人との出会いなど全体を通して、今までに体験することのできないことばかりだった。本当に良かったです。

園田学園女子大学 3 年生 前田 幸子 ポジション…センター

1. いっしょに ホームステイの時には、ホストファミリーの人達と楽しく過ごせ、今までに経験した事のないことばかりでしたが、ホストファミリーと一緒にいた5日間はとても楽しかったです。英語があまり話せなくても、一緒にいるうちに、家族の人達との会話が自然と弾んできてとても楽しい雰囲気となり、本当の家族のように思えてきました。向こうのホストファミリーの方も、私達の事を本当の家族の様に接して下さいました。ホストファミリーやチーム一人一人と一緒に過ごせた日々は私にとってすごく貴重なものとなりました。

2. 自分らしく このオーストラリア遠征では、自分らしいプレーができチームに貢献することができたと思います。このチームのチームカラーは自分達のチームにはないようなチームカラーで独特でした。この独特なチームの中で自分らしさを生かしてチームを盛り上げ声を出して、全力でプレーすることができたと思います。

3. 試合して 日本とオーストラリアとの気候の差が違いすぎていて日本の寒さからオーストラリアに来て、かなりの暑さの中での試合は大変でしたが、試合をしていくうちに、他の大学からいろいろな選手の集まりとは思えないほどの、チームになったのでとても良かったと思います。試合をして日本とオーストラリアの差を感じました。体格やパワーやスピード何をとっても日本人とは違ってはるかに上回っていました。オーストラリアの人達のプレーをみて学んだこともたくさんあり、とても良い勉強となりました。

4. 楽しい 全般的に楽しかった。試合、観光の全ての一つ一つがとても楽しかった。この遠征では確かに試合をすることが第一の目的ですが、私はその他にも、もっと大切なことを経験し自分自身にプラスになることばかりで、とてもいろいろな事が楽しく良い遠征で終えることができました。また、試合の中で勝負にこだわることも大切ですが、このチームで私は楽しいソフトボールを学ぶ、ソフトボールが一層楽しいスポーツだと感じ、今まで以上に好きになりました。

園田学園女子大学 2回生 弓場 彰子 ポジション…ファースト

1. いっしょに 私はホームステイが同学年の4人で一緒にすることができ、とても嬉しかったです。ホームステイでは朝、晩一緒に家族の方々としてりして、オーストラリアの人の生活スタイルとか家族の暖かさとか、日本にはない素晴らしいものを通して学ぶことができました。

2. 自分らしく 私は、ホームステイをしたのが、初めてだったので、初日とか2日目ぐらいまでは、自分らしくいることができなくて、少ししんどかったです。でも、試合をすることで、いつもの自分らしさが出てきて、ホームステイ先の家に戻っても自分らしくいることができましたし、家族の方々との会話も自分からできるようになりました。

3. 試合して いろんな大学の方と初めて海外で試合ができ、外国人の方のパワーやソフトボールのスタイルの違いは、とても良い勉強になりました。単独のチームではなかったのですが、チームワークができるかどうか最初は心配でしたが、一戦、一戦終えていくたびに本当のチームのようになっていき、最終戦の試合では全員が一つになって、すごく良い雰囲気でした。試合を通して色々なことを学び事ができました。

4. 楽しい オーストラリアに着いた初日は、さすがに不安がいっぱいで観光も落ち着いてできなかったのですが、初日からはなるべく、他の大学の方と話したり、一緒に行動したりしようと思って頑張っていたら、自然と不安な気持ちもなくなってきて、逆に楽しくなってきました。2、3日後には、オーストラリアの気候にもなれて、オーストラリアの素晴らしい景色を楽しく観光することができました。

5. その他 私は、海外に行ったのが今回が初めてだったので勉強になることだらけだったのですが、その中でもホームステイは本当に良い体験ができたと思っています。オーストラリアでは、父親も子ども達みんな母親の手伝いをし、日本みたいに全て母親まかせみたいな所が、少しもみられなかったことには本当にびっくりしました。私も見習わないといけないなど、ホームステイではいろいろな事を勉強させられました。

大阪国際女子大学 3回生 佐濃 佳美 ポジション…キャッチャー

1. いっしょに 全国のいろんな大学のメンバーが一つのチームになり、一緒にプレーをして、一緒に時間を過ごし一緒にいろんな体験をし、交流を深める事が出来た。普段は敵同士なのに、同じチームとして、勝利に向かって一つになる。不思議な気持ちになりながらも、二度と味わえないこの感覚を得られてとても幸せでした。

2. 自分らしく 合わせる所は合わせて、自分らしくを出すところは出せたと思う。

3. 試合して 個人個人の意識のレベルが高いなかで、一緒に試合をして、チームの雰囲気に引っ張られてプレーしている事が多かった。オーストラリアのチームと試合をして、圧倒的なパワーの違いを感じた。けれども、絶対に勝てない訳ではないと感じた。このチームならどんな事でも出来そうな気がした。

4. 楽しい みんなが高い意識を持っていて、その中で一緒にプレーをすることが、楽しくて、楽しくて仕方なかった。この遠征で過ごした10日間は、一日一日がとても充実していて、毎日が楽しかった。試合に追われる訳でもなく、かといって、楽に過ごせる時間が全く無い訳でもなく、観光は観光で楽しめて、試合は試合で楽しむ事が出来た。個人

の良さが集まってこそ、この楽しさが生まれたと思う。

5. その他 減多にない機会にこのような事を経験する事ができ、人生最高の思い出になりました。いろんなスタッフの方々に支えられ、とてもスムーズに旅を進められた事をととても感謝しています。ありがとうございました。そしてお疲れ様でした。

大阪国際女子大学 3回生 川田 祐規子 ポジション…ショート

1. いっしょに 10日間の遠征でしたが、各大学から選抜して出来たこのチームがとても好きです。本当のチームのような気がしてなりません。いろんな人といろんな話ができ、私にとってプラスになることばかりでした。またこのような遠征があるのならば、参加したいものです。

2. 自分らしく 持ち前の明るさを生かして楽しく試合をすることができた。周りもすごく声が出るし、今までで一番やりやすかった。

3. 試合して 海外のチームと対戦するのは初めてのことでした。骨格の違いはもちろんのこと、パワー、スピード、どれをとっても上回っている気がした。

4. 楽しい 今まで味わったことのないホームステイでは、言葉は片言でも気持ちで会話ができた。オーストラリアの日常生活を肌で感じることをとても嬉しく思う。また、機会があれば是非行きたい。

大阪国際女子大学 1回生 奥田 祥子 ポジション…キャッチャー

1. いっしょに 私は、この遠征で他の大学から集まってきた人達と、この10日間共に過ごしても貴重な体験をしました。初めは全然知らない人達ばかりで、ちゃんと試合をやっているか心配だったけれど、みんなとすぐに仲良くでき、いつも同じ大学の人と行動したりするのではなく、他の大学の人達と一緒に行動したりして、本当に10日間という短期間だったけれど、チームワークもよく、常にみんなとコミュニケーションがとれて良かったと思いました。

2. 自分らしく この遠征では初めて他の大学から参加した人達と出会い、試合をするにあたって、この短い期間の中で、どのように自分らしさを出すのかが、とても難しいように思っていました。それで、この遠征中に「どのように自分らしさを出していけばいいのか。」と考えて、私らしさを出すには、声を出してアピールしていこうと思いました。私としては、この遠征では、自分を出すことができたと思います。他にもまだまだたくさん学んだ事があるので、それをこれから生かしていきたいです。

3. 試合して 試合をして、とても勉強になる事がたくさんありました。外国の選手と私達のパワーやスピードの違いなど、初めはすごくびっくりして不安でしたが、この人達と一緒にプレーができるんだと思うと、すごく楽しく、そしていろんなものを吸収できるような気がして、本当に良い経験をしたと思います。本当にいろいろなものを得られて、すごくオーストラリアに来て良かったと思いました。日本に帰ってきてオーストラリアで学んだこと、得たことをどんどん生かしていきたいです。

4. 楽しい 10日間のうち5日間は、ホームステイをしていて最初のうちは全然、英語も通じなくてすごく苦勞をしたけれど、だんだん慣れてきて、ホームステイ先のホストファミリーの人達と話しをするのが、楽しくなってきました。いろいろな人達、先生達と出

会うことができ、私は本当に幸せだと思います。ホームステイや観光、試合も私には全てプラスになるものばかりでした。だから本当に良かったと思います。

5. その他 この遠征に参加でき、素晴らしい10日間を過ごすことができました。この遠征で知り合った仲間たちは、本当に最だだと思います。素晴らしい先生や仲間にも恵まれ、私は本当に幸せだと思います。この経験を生かしてこれからも頑張っていきたいです。このような遠征がまたあるのならば、私は必ず参加したいと思います。

大阪国際女子大学 1回生 和田 有加 ポジション…セカンド

1. いっしょに 一緒にプレーができて幸せを感じた。日本で日本人同士と試合をしている時と比べてみると、気持ちの持ち方も全然違った。とにかく全てに関してダイナミックだった。打って、投げれて、捕れて、走れば良し！なソフトボール。スピードとパワーを体で感じる事ができた。

2. 自分らしく 自分らしくあるのが一番。吉野先生が「試合中、その人の雰囲気大切にしていきたい」とおっしゃっていた意味がなんとなく分かった気がする。自分らしくないとプレーも自分らしくなくなる。その人の持つ最高の自分がプレーで表現できたら、とても素敵なことだと思う。

3. 試合して 試合している時、失敗の事なんて考えなかった。思い切って、元気よくプレーすることをとにかく考えていた。いろいろ細かい事を考えている余裕がなかったのもあるけれど、その前に、試合に出させてもらえる喜びがあった。この試合で、自分のできる精一杯を出し切ることが、自分に与えられたことだと信じていた。

4. 楽しい 楽しい気分でソフトボールができた。何よりもこれが一番だった。試合に出させてもらった時の嬉しさ、あの新鮮さは、ずっと忘れたくない。この遠征で友達の輪が広がった。いっぱい話をして、いっぱい遊んで、どんどんソフトボールだけのつながりじゃないって思うようになってきた。友情っていいな。

5. その他 伝えていきたい。私達がオーストラリアで得たものをどんどん伝えていきたい。そのためにも練習を自分のものにしていく。外見より中身。言葉よりも行動。

福岡大学 3回生 立石 有希 ポジション…センター

1. いっしょに 2月11日からの11日間、他数の大学の人達と共に生活をし、練習、試合をしていかなければならないということで、最初の初顔合わせの時は緊張しました。でも、数日経つとすべての人達と話をしていたと思います。各大学それぞれ伝統、方針すべての面で違うと思います。そういう中で、選抜チームに入ってたくさんソフトボールを知った気がしました。

2. 自分らしく 私は、九州の大学から1人で参加していたので、内心、心細い部分も多少ありましたが、数日経つと、そんな事は関係なく、一つのチームとして、そして私もそのチームの一員として私らしく、このオーストラリア遠征を終える事ができたように思えます。試合にも出してもらい、嬉しい思いも、悔しい思いもたくさんしました。でも、それがあったから、日本に帰って私は精神的に変わった気がします。

3. 試合して 全日本チームは、明るく、楽しく全員が一つになって戦い、チームとして、とても良いチームだったと思います。試合にも出してもらいましたが、嬉しい思い

も悔しい思いもたくさん体験しました。また、吉野監督をはじめ、コーチの方々のアドバイスはすごく勉強になり、日本に帰って自分のチームに戻ったら、この経験をぜひ生かしたい、伝えたいと思いました。

4. 楽しい 初めての海外、初めての日本代表…何もかも初めてで不安もありましたが、貴重な体験をさせて頂きました。素晴らしいスタッフの方々にも恵まれ、この経験は今後の部活だけではなく、私自身の自信になると思います。海外のソフトボールは日本と違った面がたくさんあります。そういった部分も日本のソフトボールに取り入れてプラスになる面は、全部とは言いませんが、あると思いました。

5. その他 11日間、本当にお世話になりました。今年は全日本大会に4年ぶりに行けました。



表紙デザイン・写真・カット等の募集

ウインドミルの誌面を飾るものを次の要領で募集します。ご応募ください。

1. 全日本大学ソフトボール連盟の事業を表すのにふさわしい写真・カット・詩歌などの掲載可能な作品
2. 優秀な作品は、ウインドミルに掲載し、氏名を発表します。特に優れた作品は、表彰し記念品を授与します。
3. 応募資格は、学連加盟大学の学生に限ります。
4. 作品は未発表のものに限り、著作権は連盟に帰属します。
5. 締切は、毎年11月末日です。
6. 送付・問い合わせ先

〒474-0011 愛知県大府市横根町名高山55 中京女子大学 水谷 博

FAX (0562) 44-0310 渉外課気付

E-mail mztn@chujo-u.ac.jp

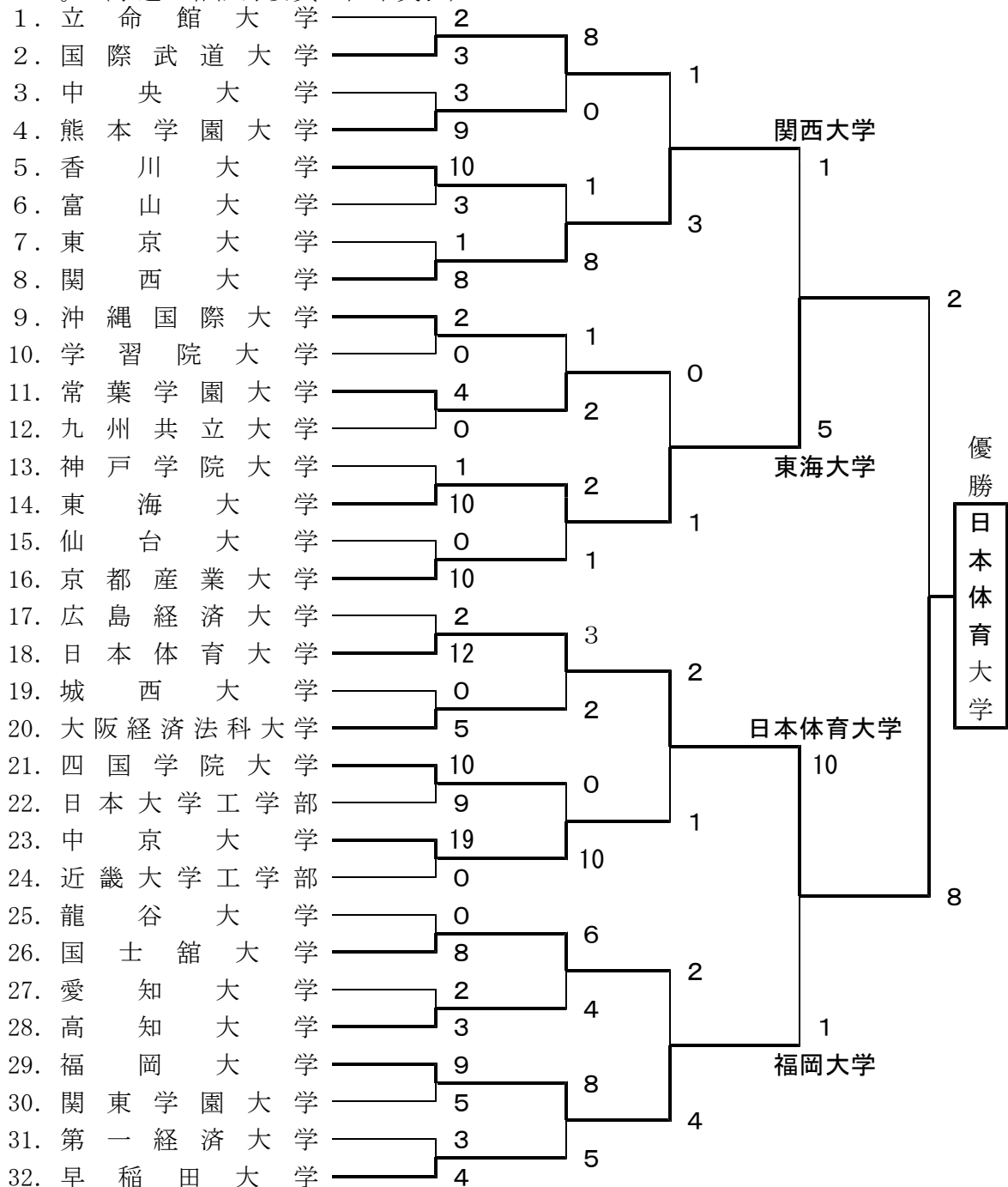
文部大臣杯第35回全日本大学男子ソフトボール選手権大会

会期：平成12年8月4日(金)～8月7日(月)

会場：香川県丸亀市土器川河川敷グラウンド

大会概要

本大会前に開催している東日本および西日本大学ソフトボール選手権大会は、悪天候により東日本大会では開催できず、西日本大会では初日のみの開催となった。その鬱憤を晴らすかのように今大会はすばらしい晴天が続き猛暑を超え酷暑の中で熱戦が繰り広げられた。そんな中で優勝の栄冠を勝ち取ったのは、昨年度3連覇を阻止された日本体育大学(23回目)であった。決勝戦の相手東海大学は一昨年のリベンジに燃えたが惜しくも準優勝に終わった。大学ソフトボールの頂点を目指して集った32チームの戦いを観戦して、今の大学生が無くしてしまったものがここにはあったような気がした。また、開会式から閉会式までの円滑な大会運営をしてくださった地元の方々のご尽力には頭の下がる思いであった。(学連広報記録委員 山本英弘)



決勝戦の結果

東海大学：0000002 | 2 (東) ●林・白井・庄司一渡辺
 日本体育大学：312020X | 8 (日) ○川口一杉田

東海大学		1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
(一)	4大津 崇臣	三振		遊内安		遊ゴロ		
	H中野 貴祥							三内安
(二)	5佐藤 淳	遊ゴロ		右飛		四球		
	H小池 義晃							左中2B
(三)	6斉藤 恒寿	三振		遊ゴ失		遊内安		
	H塚越 徹							三振
(四)	31白井 健		三振	右飛		右飛		右中安
(五)	2渡辺 周平		遊ゴロ		遊ゴロ	三ゴロ		三振
(六)	9多胡 宏茂		三内安		遊内安		中飛	
(七)	7比良 俊晴		三振		三振		三振	
(八)	D冲出 良平			死球	四球			
	H永井 雅裕						三振	
(九)	8林田 雄三			投ゴロ	遊ゴロ			
	H田中 健生							三振
DH守備 1 林 大樹		9 古閑光太郎		1 庄司 寛晴				
日本体育大学		1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
(一)	⑥津本 大貴	右中2B	右前安(塁上死)	右飛				
	H澤井 孝延						三振	
(二)	9佐藤 健太	二ゴロ		一ゴロ		右中2B	一ゴロ	
(三)	①川口 大	左中2B		右越本		右中3B		
	R宮川 道隆					R		
(四)	2杉田 剛	遊内安(4E)		中越本		三ゴロ		
(五)	8花田 和也	三振		四球		二内安(塁上死)		
(六)	D勝呂 昌宏	二ゴ失(塁上死)		投犠バ		死球		
(七)	3安武 直樹		三振	中飛		二ゴロ		
(八)	5小川 浩		遊ゴロ		中飛			
	H武田 学						二ゴロ	
(九)	4岡 巧		右中3B		中飛		左前安	
DH守備 4 高田 昌直								

戦評：日本体育大学は1回一番津本がいきなり右中間を破る二塁打で出塁すると、三番川口も左中間を破る二塁打で先取点を挙げ、打線に火を付けこの回3得点を挙げた。さらに東海大学林投手を攻め続け、3回まで2本塁打を含め6得点、5回にもさらに2得点を追加して試合を有利に進めた。一方東海大学は日本体育大学川口投手の元に6回まで4安打散発に抑えられ、7回に代打攻勢で2安打2得点を挙げ、食い下がるも後続を断たれ、2年ぶりの決勝進出も優勝へはつなげなかった。こうして、日本体育大学は2年ぶり23回目の優勝を飾った。(記録員 山地直美)

男子大会打撃ベストテン (規定打席数12以上)

左打	位置	選手名	大学名	打席数	打点	得点	打点	犠打	四球	死球	三振	盗塁	残塁	本塁打	打撃率	試合	
○	3	小島 郊正	関西	15	13	9	4	7	2	・	・	・	1	5	2	6.92	4
○	DH	吉村 啓	中京	12	8	5	6	5	2	・	2	1	・	1	1	6.25	3
	8	花田 和也	日本体育	16	13	8	4	11	・	2	1	1	2	6	2	6.15	5
	2	太田 順也	福岡	14	10	6	2	1	・	4	・	2	2	8	・	6.00	4
	8	気田 朋幸	国土	13	11	6	5	4	・	2	・	1	・	3	2	5.45	3
○	6	津本 大貴	日本体育	18	17	9	6	1	・	1	・	4	・	3	・	5.29	5
○	DH	小林 大介	関西	15	14	7	3	4	・	1	・	2	・	5	・	5.00	4
	7	門田 拓	福岡	15	14	7	2	2	1	・	・	・	・	2	2	5.00	4
○	7	岡 巧	日本体育	14	12	6	4	3	1	1	・	2	・	4	1	5.00	5
	6	西村 光生	福岡	14	10	5	5	4	2	2	・	1	・	1	1	5.00	4

男子大会上位チーム投手成績

左 投	選手名	大学名	回	打 者 数	打 数	被 安 打	失 点	自 責 点	被 責 打	与 四 死	奪 三 振	被 本 打	投 球 数	防 御 率	勝 試 合	負 試 合
	星 健太	関 西	23	93	85	16	6	1	1	7	13	1	342	0.30	3	1
	加藤 大樹	東 海	26	97	90	12	2	2	2	5	33	・	369	0.54	3	0
	川口 大	日本体育	35	145	132	29	8	6	3	10	39	2	507	1.20	5	0
	澤岷慎太郎	福 岡	23.1	3110	95	23	18	15	3	12	22	6	417	4.50	3	1

大会を振り返って

日本体育大学男子ソフトボール部
主将 佐藤 健太

『楽しもう。』と言えるようになったのは、2回戦の大阪経法大学との試合に勝ってからです。

インカレとは、大学生にとって最大の目標にしている大会であり、4年生にとっては最後の大会でもあるのです。

トーナメント方式である為、負ければそれで終わりなので、否応なしでも力が入るのです。そして大会も始まり、『勝つぞ。』そんなこの言葉だけが先走っていました。1回戦はなんとか勝ったものの、続く2回戦。打てない、守れない。相手の2点リードで迎えた最終回、私はただ『頼む。』としか言えず、この時ほど自分の無力さを感じたことはありませんでした。結局、仲間の活躍により逆転し、なんとか準々決勝に進むことが出来ました。試合終了後、多くの人に『やっぱり日体大は強いね。』と言われました。勝ったからであり、負けていれば言われたい言葉だったでしょう。

【勝負とは、強いチームが勝つのではなく、勝ったチームが強いのである。】そんな言葉が思い出され、同時に『勝つぞ。』という安易な言葉が消えていきました。それからは、とにかく楽しもう。ソフトボールを楽しんでいこう。私たちがソフトボールを始めた原点に戻り、プレーを、そして応援を楽しみました。優勝の《優》の字には（余裕をもつ、ゆったりする）という意味があります。勝つことだけに捕われていて、もう1つの大切な事を忘れてしまうところでした。

そして、もう1つ忘れてはならないものが感謝の気持ちです。人が何かを成し得るときには必ず誰かからの、サポートがあるはずで、大会前にはOBの方々が激励に訪れてくれました。大会中には、たくさんの父母の応援がありました。数え上げれば切りがないほどの多くの人々に囲まれ、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。そして最後に、仲間へ、そして自分に、『ありがとう』です。

文部大臣杯第35回全日本大学女子ソフトボール選手権大会

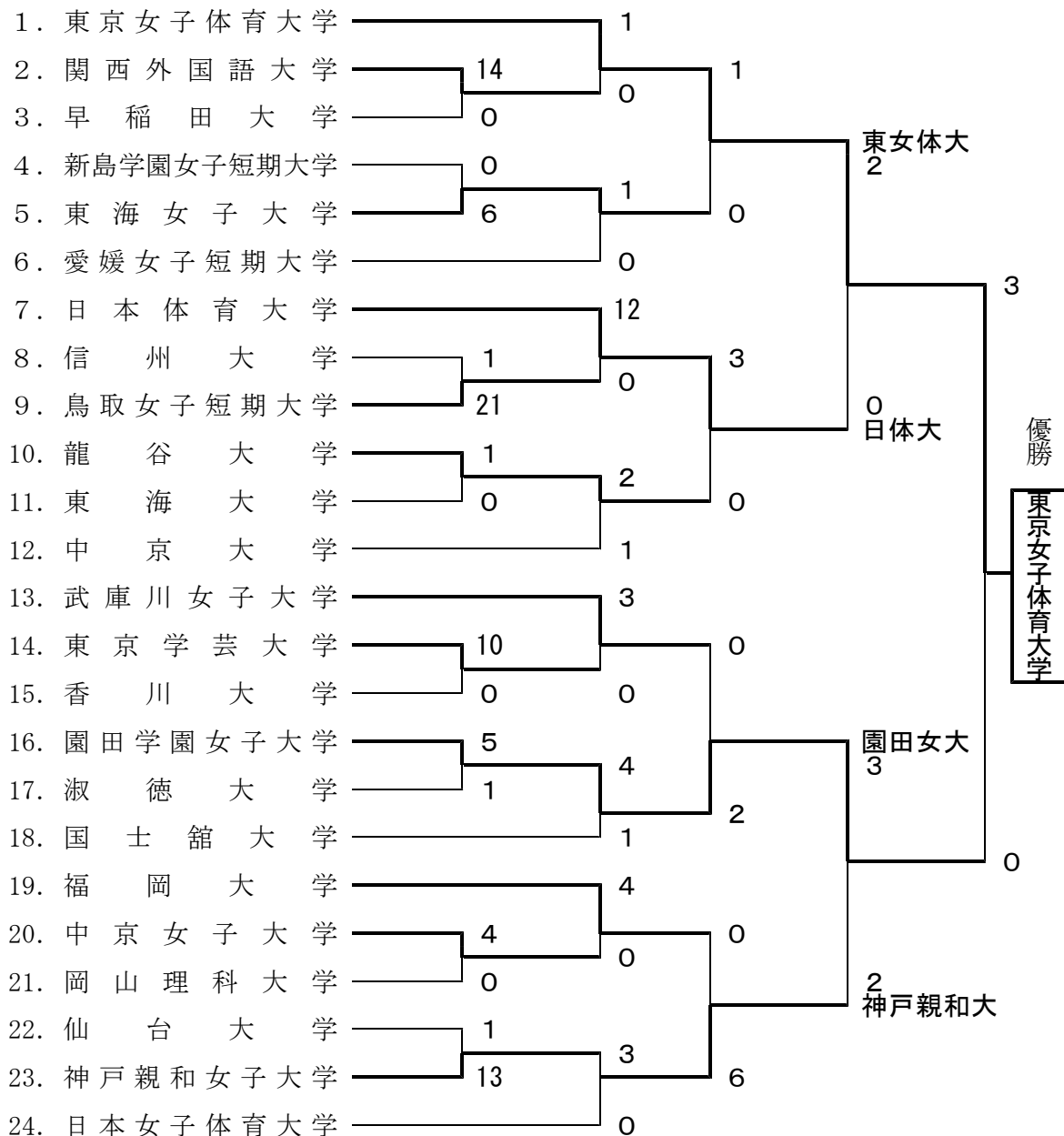
会期：平成12年8月4日(金)～8月7日(月)

会場：香川県丸亀市土器川河川敷グラウンド

大会概要

夏の好天に恵まれた4日間、讃岐富士を仰いで河川敷とはいえ見事に整備された競技場で熱戦は展開された。本大会の注目点は、何と言ってもオリンピック代表の増淵投手を有する東京女子体育大学の戦いぶりであったが、増淵投手は4試合を一人で投げ抜き、完全試合と無安打無得点試合が各1、一安打試合が2で十分に期待に応えるものであった。しかし、3連覇を果たしたとはいえ、打線は奮わず圧倒的な破壊力が見られなかったのは残念であった。

他のチームでは、園田学園女子大学が、強豪チームを確実に撃破して決勝戦に進出したのが注目された。その決勝戦では力尽きて増淵投手の前に2年連続完全試合負けを喫するという結果になったが、見事な準優勝といえよう。また、3回目の出場にして、昨年準優勝の日本女子体育大学を破って3位入賞を果たした神戸親和女子大学は今後も目を離せないだろう。(中京女子大 水谷 博)



決勝戦の結果

東京女子体育大学 : 0 1 0 0 0 0 2 | 3 (東) ○増淵一武井

園田学園女子大学 : 0 0 0 0 0 0 0 | 0 (園) ●小島一柵本

東京女子体育大学	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
(一) D五十嵐清夏	一ゴロ		投ゴロ		左邪飛		3バ安
(二) 6佐藤理恵	中前安		左飛		左飛		5犠バ
(三) 5平下真弓	遊ゴロ		二ゴ失		左越2B		左犠飛
(四) ⑦見月志保	右飛		二ゴロ		遊ゴロ		右前安
R稲垣彩子							R
(五) 3神田多栄		左中2B		中前安		三ゴロ	
(六) 9豊住良重		5犠バ		5犠バ			
H太田真紀子						中前安	
9山下しのぶ							遊ゴロ
(七) ①増淵まり子		中前安		四球		二ゴロ	
R藤原智子		R					
(八) ④品川典子		三犠バ		三ゴロ			
H谷合美智子						遊ゴロ	
(九) ⑧大沼由紀子		三振					遊内安
H岡田麻紀子				投直			

DH守備 2 武井 沙織

園田学園女子大学	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
(一) 4大西真弓	遊直			中飛			三振
(二) D幅中瑠理	三ゴロ			三飛			三振
(三) 8前田幸子	三振			三振			二ゴロ
(四) 6高祐紀子		一ゴロ			三振		
(五) 3弓場彰子		投ゴロ			三振		
(六) 7松本千代		一邪飛			遊ゴロ		
(七) ⑤松浦香菜美			左飛				
H大澤亜弓						三振	
(八) 2柵本亜希			二飛			三振	
(九) 9三村朋子			三ゴロ			三振	

DH守備 1 小島優佳利

増淵投手完全試合の内容：内野ゴロ6、内野フライ2、外野フライ2、邪飛1、三振10

戦評：東京女子体育大学3年連続12回目の優勝!! 二回表東京女子体育大学は先頭打者の神田が左中間を破る2塁打で出塁、豊住が送ったあと投手の増淵が二遊間突破の的適時打を放ち、先制点を挙げた。7回にも無死一・二塁を確実に送り、平下のレフト犠牲フライと適失を誘って2点のダメを押した。園田学園は増淵投手の前に完全に押さえ込まれ、昨年に続いての完全試合で完敗した。増淵投手は、オリンピック代表として貫禄完全試合達成で優勝戦に華を添えた。(記録員 寺岡慶介)

女子大会打撃ベストテン (規定打席数7以上)

左打	位置	選手名	大学名	打席	打数	安打	得点	打点	犠打	四球	死球	三振	盗塁	残塁	本塁打	打撃率	試合
○	4	矢野美智子	福岡	7	7	5	1	2	・	・	・	・	・	2	・	714	2
○	3	長澤泉	龍谷	7	7	5	1	5	・	・	・	・	・	4	・	714	3
○	84	三浦美紀子	鳥取女短	9	8	5	4	3	・	・	1	1	1	1	・	625	2
○	4	藤本 索子	日本体育	8	8	5	2	・	・	・	・	・	3	3	・	625	3
○	5	平川香奈子	武庫川	7	7	4	1	・	・	・	・	・	・	1	・	571	2
○	7	島田佳代子	神戸親和	12	9	5	4	1	1	1	1	1	・	4	・	556	3
○	3	神田多栄	東女体	13	11	6	2	1	2	・	・	・	・	3	・	545	4
○	7	増田由香里	東京学芸	8	6	3	4	・	・	2	・	1	3	1	・	500	2
○	6	一条美紀	東京学芸	9	9	4	1	1	・	・	・	・	・	3	・	500	2
○	6	佐田智美	日本体育	9	9	4	1	1	・	・	・	・	・	3	・	444	3

女子大会上位チーム投手成績

左 投	選手名	大学名	回	打者数	打数	被安打	失点	自责点	被犠打	与四死	奪三振	被打球数	防御率	勝試合	負試合
	増淵まり子	東女体	28	88	88	3	・	・	・	・	38	・	0.00	4	0
	綾部 稚恵	東海女子	13.1/3	48	48	6	・	・	・	・	9	・	0.00	2	0
	小島優佳利	園田学園	25.1/3	97	86	19	3	2	6	5	10	・	0.55	4	1
	松本 薫	神戸親和	24	95	87	17	3	2	2	6	29	・	0.58	3	1
	寺原 満美	日本体育	17	66	60	11	2	2	4	2	10	・	0.82	2	1
	池谷 絢子	東京学芸	13	59	55	16	3	2	2	2	13	・	1.08	1	1
	山下 郁代	龍 谷	21	77	72	14	4	4	2	3	20	2	1.33	2	1

仲 間

東京女子体育大学主将 平下 真弓

『勝った！！ 私達は勝ったんだ。』

この瞬間応援団の人達、保護者の方々、そしてベンチが歓喜の声に包まれた。インカレ3連覇を成し遂げた。

大学生にとって最大の大会であるこの大会を目指し、毎日練習に励んできた。その思いが今やっと報われたと思うと本当に嬉しかった。そしてすばらしい仲間と共に喜びを分かち合い、戦い抜く事が出来て本当によかったと思う。

インカレの初日は思う様な試合ができず『このような状態で本当に勝てるのだろうか？優勝は出来るのだろうか？』という不安な気持ちで、みんなの表情に焦りが色濃く表れていた。その夜、4年生全員が一つの部屋に集まり話し合いを開いた。私は応援してくれる仲間達に不甲斐ない試合をしてしまい申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。しかしみんながかけてくれた言葉はまったく違っていた。

「勝たなくてはいけないという気持ちが強すぎる、悔いのないように楽しくやればいい。」私はその言葉に感激した。勝ちたいという気持ちばかりが先走り、チームプレーを忘れていた事に気づき、私達には応援団が付いてくれている！この事を実感した時、涙が止まらなかった。そして明日は気負う事なく全員で楽しくプレーしようと心に決めた。

そして翌日のベンチの雰囲気は初日とはまったく違っていた。『楽しい、本当に楽しい！！』初戦とは違った雰囲気で試合が出来た。それはみんなも同じだったと思う。そして決勝戦。各々が自分の仕事をしっかりと果たし理想的な試合で優勝する事が出来た。とても嬉しく、そして感動した……。

私はこの優勝を応援してくれた全ての人達、影で支えてくれた仲間達と共に分かち合いたい。ベンチと応援団の心が一つになり、一緒に戦い、支えてくれた仲間がいたからこそ成し遂げられた3連覇だと思う。

そして、来年は後輩達にも4連覇という新しい目標を持って頑張ってもらいたいと思う。

第27回全日本大学男子・女子ソフトボール東西対抗結果

女子試合結果

西軍：0000101 | 2 (西) ●宮原・松本・小長井一柁本
 東軍：020001X | 3 (西) ○増淵・寺原・増淵一鈴木

西	軍	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
一	4 大西(園田学園)	三振			三振		中前安	三振
二	5 薦田(龍谷)	三ゴロ			三振		三犠バ	
三	9 前田(園田学園)	三振			三振		二ゴロ (塁上死)	
四	8 安田(中京)		三振			遊内安		中前安
五	6 高(園田学園)		遊ゴロ			右3B		左前安
	PR 幅中(園田学園)							R
六	⑦ 小倉(神戸親和)		二ゴロ					三バント
	H7 松本(園田学園)					三振		
七	D 本荘(龍谷)			三ゴロ		中直		三振
八	3 計盛(神戸親和)			右ゴロ		三振		中前安
九	2 柁本(園田学園)			三振			一ゴロ	死球

DH守備1 宮原(武庫川)・松本(神戸親和)・小長井(東海女子)

東	軍	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
一	5 平下(東京女体)	二ゴロ	中2B			三飛	三振	
二	8 野田(日本体育)	三振	三振			四球		
三	2 鈴木(日本体育)	左前安		二飛		三振		
四	⑦ 見月(東京女体)	三振				死球		
	R7 千葉(日本女体)		(塁上死)	四球				
五	3 永原(日本体育)		左前安	中飛		遊ゴロ		
六	9 神田(東京女体)		左前安	三ゴロ			中2B	
七	⑥ 高崎(淑徳)		左前安				捕失	
	H6 一条(東京学芸)				三振			
八	① 増淵(東京女体)		二ゴロ				三振	
	H1 寺原(日本体育)				遊飛			
九	4 藤本(日本体育)		一飛		三振		一犠バ	

総評：注目の増淵投手（東女体）が予想通りの素晴らしいピッチングで1回表から観客を魅了した。4回までノーヒット、毎回の7奪三振であった。試合の方は、東軍が2回裏に3連打で満塁のチャンスをつくり、平下選手（東女体）の見事なタイムリーで2点を先行した。一方、西軍は5回に高選手（園田学園）のライトオーバーで1点、さらには最終回にピンチを迎えて再出場した増淵から計盛選手（神戸親和）が執念のセンター前ヒットを放ち、1点差まで詰め寄ったが、あと一歩及ばなかった。オリンピック出場の増淵投手を西軍の地元の西宮に迎えたということもあって、選手、観客とも近年まれにみる盛り上がりの中で行われた好ゲームであった。

【クリニック】

女子と男子のゲームの間に、中学生・高校生を対象に、選手達によるクリニックが行われた。参加者150余名を、投手部門、守備部門（投と捕）、打撃部門（スイングチェック）に分け、吉野監督（東女体）、板谷監督（園田学園）、細田コーチ（東女体）がそれぞれをコーディネートした。1時間という短い時間であったため、技術的な定着や深まりはなかつ

たかかもしれないが、受講生の子どもたちが身近なプレイヤーと交流する中でこれからの刺激や励みになるという当初の目的は達成できたのではないかと考えている。

男子試合結果

東軍		西軍		1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
東	軍	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回		
一	6 齊藤(東海)	右前安		三振						
	H6 津本(日本体育)						左飛			三振
二	4 高波(仙台)	右前安		三振						
	H4 新井(城西)	(8OS)						遊直		右直
三	1 川口(日本体育)	右飛		右前安						
	H1 加藤(東海)							中飛		
四	5 臼井(東海)	中飛		遊ゴロ						三振
五	7 気田(国士舘)	三振					四球			四球
六	8 花田(日本体育)		三振			三邪飛				左2B
七	3 岡(日本体育)		中前安			三振				三振
八	2 渡辺(東海)		中飛			三振				三振
九	9 佐藤(日本体育)		中飛							
	9 多胡(東海)							四球		遊ゴロ
西	軍	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回		
一	5 江上(福岡)	三バ安	遊内安	三振		一ゴロ				
二	8 樋口(京都産業)	遊内安	投失	投飛		遊内安				
三	7 橋口(中京)	左2B	四球		右安失	三振				
	7 丸野(九州共立)									
四	D 小島(関西)	死球	死球		二失			中飛		
五	2 高橋(関西)	中2B	三振							
	2 太田(福岡)					中飛		左邪飛		
六	9 中村(関西)	三振	遊ゴロ		中3B			三振		
七	4 高橋(関西)	三邪飛		中前安	中飛					
八	6 福井(中京)	一ゴロ	(塁上死)	三振	遊飛					
九	3 田中(福岡)		遊内安	投内安				右邪飛		

DH守備 1 西條(京都産業)・○竹下(神戸学院)・澤岷(福岡)

総評：初回、東軍がヒットとエラーで1点を先行したが、その裏、西軍は川口投手（日体大）の乱調につけ込み、2本の2塁打を含む4安打を集中させて一気に4点を奪った。その後は終始西軍のペースでゲームは進み、終わってみれば7-1で西軍の勝利であった。ゲームを通してみると、いくつか男子らしい力強さも見られたが、もう少し集中力を高めたプレーを見たかった。（関西学生ソフトボール連盟理事長 森田啓之）

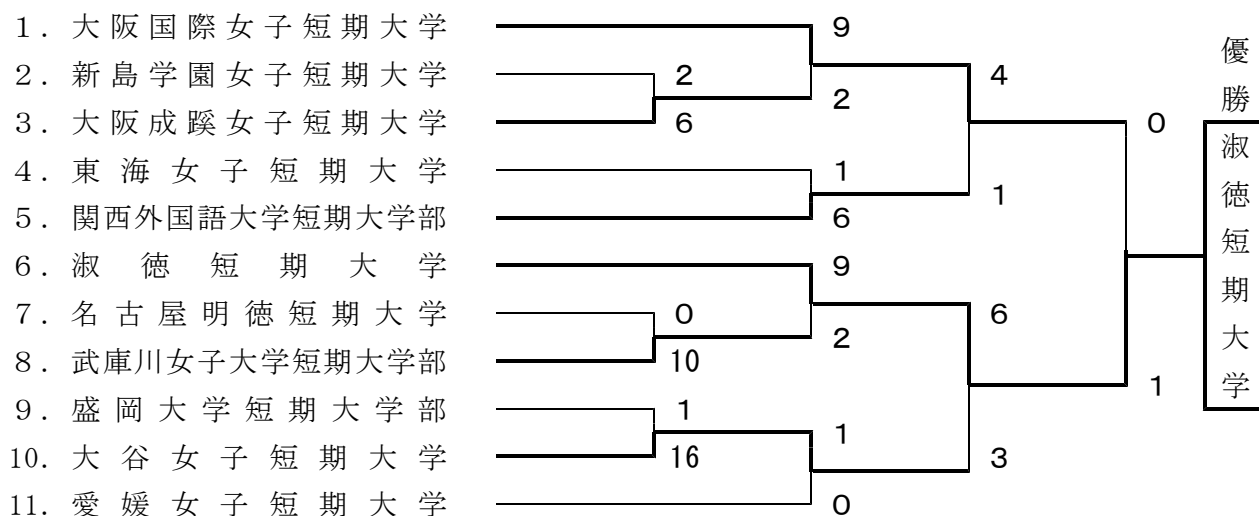
対戦成績 男子西軍の13勝14敗，女子東軍の22勝（6年連続）5敗

表彰選手 最優秀選手賞 男子：樋口陽浩中堅手（西軍、京都産業大学）
 女子：平下真弓三塁手（東軍、東京女子体育大学）
 敢闘賞 男子：加藤大樹投手（東軍、東海大学）
 女子：高祐紀子遊撃手（西軍、園田学園女子大学）

第6回全日本女子短期大学ソフトボール大会

会期：平成12年8月18日(金)～8月20日(日)

会場：明星大学日野キャンパス野球場



大会感想

会場を緑豊かな多摩地区に移して開催され、決勝戦は3年連続優勝の大阪国際女子と第1回優勝の淑徳が勝ち上がり、最終回、淑徳が1点を挙げサヨナラ勝ち、2回目の優勝を遂げた。初出場の大谷女子の3位に入る活躍と盛岡大学が出場6回にして初得点を記録したことは記しておかなければならない。

なお、開会式の中で3年連続優勝の大阪国際女子短期大学が特別表彰を受けた。また、明星大学日野キャンパスは東京の南西部に位置し、交通の便が良く、宿泊施設も近くて、この会場で来年も是非開催の声が参加チームから聞かれた。特に印象に残った選手としては、最優秀選手に輝いた渡辺智子内野手(淑徳短期大学)と優秀選手の表彰を受けた福村智美投手(大阪国際女子短期大学)があげられる。(記録長 高田力士)

大会打撃ベストテン (規定打席数7以上)

左打	位置	選手名	短大名	打席数	打点	安打	得点	犠打	四球	死球	三振	盗塁	残塁	本塁打	打撃率	試合	
	48	吉澤 純子	武庫川	7	6	5	2	4	・	1	・	・	・	4	・	833	2
○	5	中越 規菜	大阪国際	11	10	7	4	2	・	1	・	・	・	3	・	700	3
	5	森上ゆきの	大阪成蹊	7	6	4	1	1	1	・	・	・	1	2	・	667	2
○	7	増野 由佳	関西外語	7	6	4	3	・	・	1	・	・	・	2	・	667	2
○	8	須藤亜由美	関西外語	7	5	3	1	1	2	・	・	・	・	3	・	600	2
	3	福村 智美	大阪国際	9	9	5	1	1	・	・	・	・	・	4	・	556	3
	9	南 みどり	関西外語	7	6	3	2	・	1	・	・	・	・	・	・	500	2
	4	藤井 麻妃	大阪国際	11	11	5	1	1	・	・	・	・	・	2	・	455	3
○	6	水野 絵美	淑徳	11	11	5	3	・	・	・	・	・	・	3	・	455	3
	9	植松美由紀	大阪国際	10	7	3	1	2	1	1	1	・	・	4	・	333	3

